

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術

活動報告

2021

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか.....	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について.....	2
1. 教育プログラムの実施.....	6
• 大阪大学の取組.....	6
• 大阪大学 特色ある授業.....	14
• 京都大学の取組.....	17
• 京都大学 特色ある授業.....	22
• 合同講義.....	24
• 阪大学生の声.....	30
• 京大学生の声.....	32
• STiPS 修了生ネットワーク.....	34
2. プログラム推進委員会の運営.....	36
• 実施体制.....	36
• アドバイザー会議.....	37
• カリキュラムの発展及び拡充.....	37
• 研究会やイベント開催の企画及び調整.....	38
3. SciREX 事業への参画.....	44
• サマーキャンプへの参画.....	44
• 他拠点への講師派遣.....	48
• コアコンテンツ作成、行政官研修などへの講師派遣.....	48
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施.....	50
• STiPS Handai 研究会（シリーズ 科学技術×公共政策）.....	50
5. 共進化実現プログラムの実施.....	58
• 「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創.....	58
• 児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用.....	59
• 研究業績の評価に基づく資源配分効果の動態的特性分析のための基礎研究.....	60
6. 関西ネットワークの発展.....	64
• STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）.....	64
• その他.....	76
7. 国際連携の推進.....	78
• 国際連携.....	78
• 海外調査及び発表等.....	78
8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）.....	80
• 大阪大学.....	80
• 京都大学.....	86

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きてみたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きてみたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きてみたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組

織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であるとと考えています。

STiPS 設立拠点長 小林傳司(大阪大学)

❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点（Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere：STiPS）」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

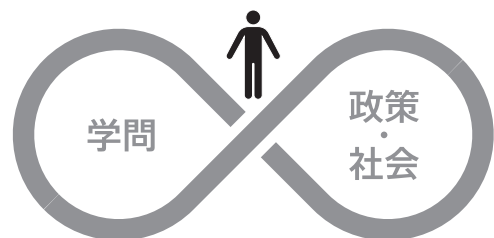
STiPSでは、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPSでは、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPSでは、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPSでは、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2022年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	名誉教授／設立拠点長	科学哲学、科学技術社会論
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授／拠点長	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任講師	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
小林 万里絵	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	
真栄城 拓也	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	国際政治学、日米関係史、沖縄返還
神里 達博	大阪大学COデザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データビリティフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター	准教授	科学社会学、科学技術社会論、科学技術政策論
水町 文里	大阪大学社会技術共創研究センター	特任講師	科学コミュニケーション論、科学教育
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	准教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授（ユニット長）	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授（副ユニット長）	倫理学、ターミナルケア、死生学
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
伊藤 順一	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経済学、応用ミクロ経済学、計量経済学
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授	可視化
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
広井 良典	京都大学こころの未来研究センター	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
要藤 正任	京都大学経営管理大学院	特定教授	地域経済、ソーシャル・キャピタル
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
南 真祐	京都大学iPS細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
間宮 弘晃	京都大学iPS細胞研究所	特命講師	薬価、薬事関連政策
祐野 恵	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	公共政策、地方自治、地方議会

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

❖ 大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016年6月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013年4月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が2011年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目6単位および選択科目8単位以上の計14単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国5拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく2013年4月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が2008年度から始めたものです。これは、大学院生および6年制課程の学部5、6年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目2単位および選択科目6単位以上の計8単位以上の修得が必要です。

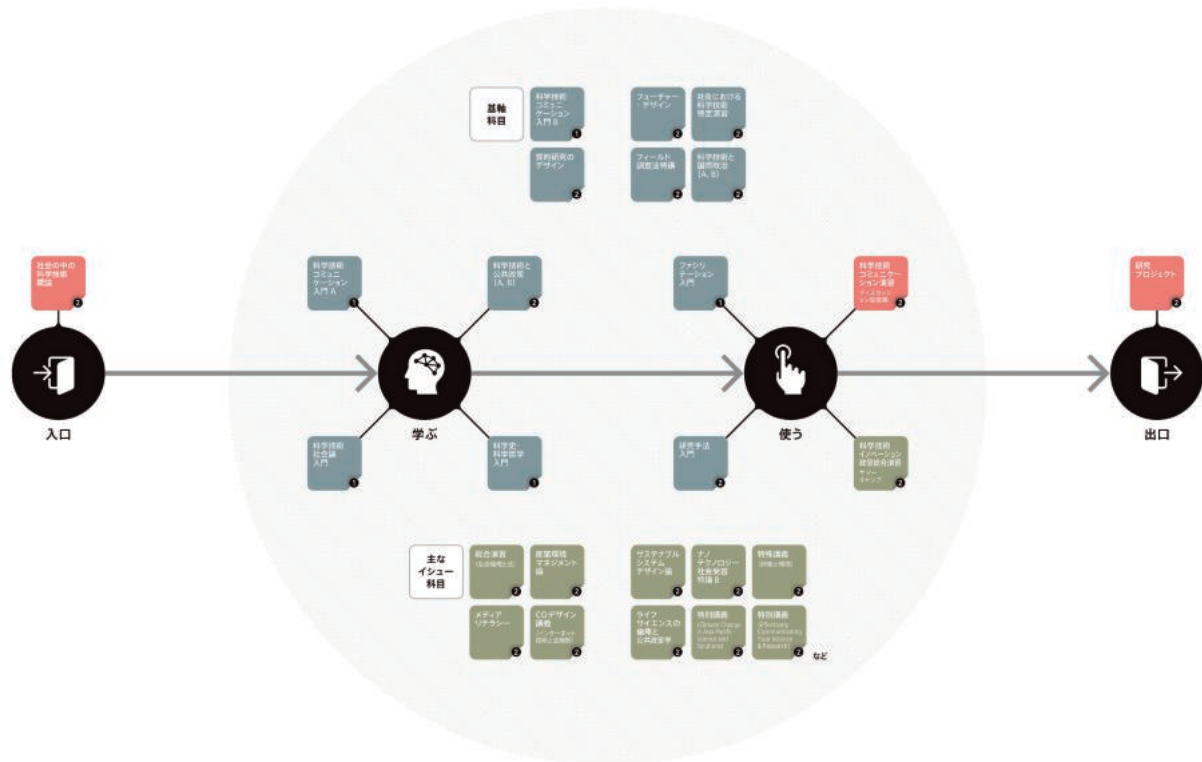


図 副専攻／高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」の科目

大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2021 年度 在籍者数の合計：17 人

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学研究科 3 名、基礎工学研究科 1 名、薬学研究科 1 名、工学研究科 1 名、情報科学研究科 1 名）

修了者数：5 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：3 人）

*副専攻プログラムの修了証はこれまで、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、薬学：1 人、工学：2 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：3 人、工学：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学：2 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：1 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、基礎工学：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳 民間企業：3 人）

2019 年度

履修登録者数：17 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 進学：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：6 人、薬学：1 人）

修了者数：8 人（進路内訳 在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人、不明：1 人）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2021 年度 在籍者数の合計：10 人

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 人間科学研究科 1 名、経済学研究科 1 名、理学研究科 2 名、基礎工学研究科 1 名、工学研究科 1 名、国際公共政策研究科 1 名）

修了者数：3 人（進路内訳 在学中：2 人、民間企業：1 人）

* 高度副プログラムの修了証はこれまで、学生が高度副の 8 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、8 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく高度副プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 8 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：3 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：1 人、工学：4 人、基礎工学：3 人、国際公共政策：2 人、生命機能：1 人）

修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：5 人

2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、法学：1 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：8 人

2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：2 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、国際公共政策 1 人）

修了者数：8 人

2018 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、医学系：3 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：4 人

2019 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：4 人、医学系：2 人、工学：1 人）

修了者数：4 人

2020 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人）

修了者数：9 人

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2021 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期	
入門必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏	
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	不開講	
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	不開講	
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）	
連携必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年	
	COデザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬	
	COデザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春	
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	秋	
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏	
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬	
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春	
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏	
	選択科目Ⅰ： 基軸科目群	COデザインセンター（院）	科学技術と国際政治A	渡邊 浩崇	1	春
		COデザインセンター（院）	科学技術と国際政治B	渡邊 浩崇	1	夏
COデザインセンター（院）		科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋	
COデザインセンター（院）		科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬	
COデザインセンター（院）		質的研究のデザイン	池田 光穂	2	春	
人間科学研究科（博士前期）		フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏	
人間科学研究科（博士前期）		社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬	
工学研究科（博士前期）		フューチャー・デザイン	原圭史郎、他	2	春～夏	
基礎工学研究科（博士前期）		科学技術移転論	草部 浩一	2	不開講	
選択科目Ⅱ： 8単位以上 （選択科目ⅠおよびⅡから、それぞれ2単位以上を履修）		COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	不開講	
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	不開講	
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	不開講	
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	不開講	
	COデザインセンター（院）	特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春	
	COデザインセンター（院）	特別講義（Climate Change in Asia Pacific - Science and Solutions）	BARRETT BRENDAN	2	秋～冬	
	COデザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋～冬）	
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬	
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬	
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬	
	医学系研究科（修士）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人	2	集中（夏）	
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏	
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏	
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノインテグレイション教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	竹田 精治、他	2	不開講	
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノインテグレイション教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	竹田 精治、他	2	集中（春～夏）	
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2021 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	不開講
選択科目：6単位以上	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と国際政治A	渡邊 浩崇	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術と国際政治B	渡邊 浩崇	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	質的研究のデザイン	池田 光穂	2	春
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	秋～冬
	工学研究科（博士前期）	フューチャー・デザイン	原圭史郎、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春
	COデザインセンター（院）	特別講義(Climate Change in Asia Pacific - Science and Solutions)	BARRETT BRENDAN	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（秋～冬）
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬	
医学系研究科（修士）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人	2	集中（夏）	
工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏	
工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏	
基礎工学研究科（博士前期） （フロンティアデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	竹田 精治、他	2	不開講	
基礎工学研究科（博士前期） （フロンティアデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	竹田 精治、他	2	集中（春～夏）	
国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	
国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬	

❖ 大阪大学 特色ある授業

「社会の中の科学技術概論」(春・夏学期 隔週水曜 5・6限)

この科目は、例年であれば、ゲストレクチャー(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)とがセットになったオムニバス形式の講義・演習スタイルで運営されています。2021年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、オンラインで実施し、講義及び学生同士のディスカッションの演習スタイルで行いました。

社会の中で科学技術はどのような役割を果たし、どのような問題を惹起しているのか、人間・社会にとって望ましい成果を生み出すにはどうしたらよいのか、研究者や政策決定者、事業者、市民にはどのような責任や役割があるのかについて、科学技術の「倫理的・法的・社会的課題(Ethical, Legal and Social Issues: ELSI)」の観点から、多角的に考えました。第5回までは講義、第6回以降はゲストによる講義(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)を行いました。各回の講義内容及び担当した講師は以下の通りです(ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの)。

「社会の中の科学技術概論」

第1回(2021年4月14日)

「ガイダンス」平川 秀幸(大阪大学 教授)

第2・3回(2021年4月28日)

「社会の中の科学、社会のための科学 ブダペスト宣言から20+2年」小林 傳司(大阪大学名誉教授)

「科学技術と社会・政策のこれから」平川 秀幸(大阪大学 教授)

第4・5回(2021年5月12日)

「科学技術コミュニケーション」八木 絵香(大阪大学 教授)

「科学技術と公共政策・国際政治」渡邊 浩崇(大阪大学 特任教授)

第6・7回(2021年5月26日)

「生命科学とELSI/RRI」標葉 隆馬(大阪大学 准教授)

第8・9回(2021年6月9日)

「動物倫理」伊勢田 哲治(京都大学 准教授)

第10・11回(2021年6月23日)

「レギュラトリーサイエンス論～基準値を作ってみよう～」岸本 充生(大阪大学 教授)

第12・13回(2021年7月7日)

「法とAI・ロボット・サイバネティックアバター概論」赤坂 亮太(大阪大学 准教授)

第14・15回(2021年7月14日)

「総合討論」平川 秀幸(大阪大学 教授)



「科学技術コミュニケーション演習」(集中講義(夏))

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。

2021年度は「COVID-19をめぐる科学的助言のあり方」をグループ討議の課題として取り上げました。まず、COVID-19以前に科学的(専門的)助言のあり方が課題となった事例についての講義を行い、それらの過去事例から学ぶこと、そして、COVID-19をめぐる問題に活かせることなどを議論するという流れでした。新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、全ての行程をオンラインで実施しました。

3日間のスケジュールと内容は次の通りです。主に、グループワークを中心に進められました。

1日目

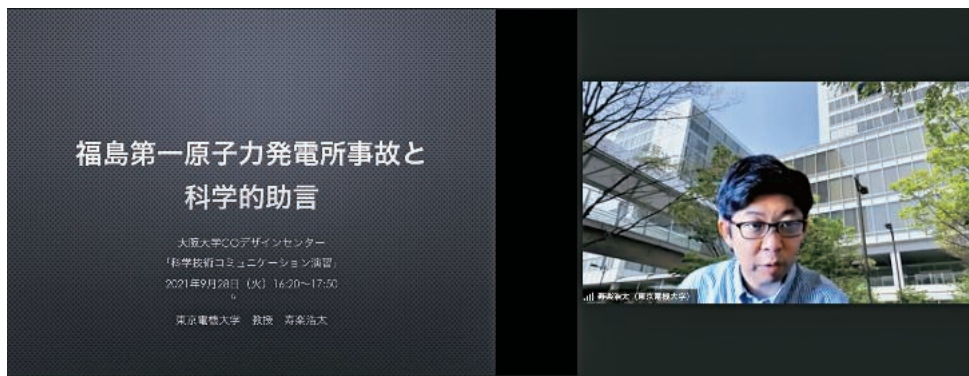
オリエンテーションと自己紹介

講義：過去事例に学ぶ

講義1「ラクイラ地震と科学的助言」大木 聖子(慶應義塾大学 准教授)

講義2「BSE問題と科学的助言」小林 傳司(大阪大学名誉教授)

講義3「福島第一原子力発電所事故と科学的助言」寿楽 浩太(東京電機大学 教授)



2日目

「問1」への個人の見解の作成(個人の作業時間)

「問1」へのグループの見解の作成(グループディスカッション)

「問1」に関する発表・全体ディスカッション

全体ふりかえり

*問1(抜粋): 講義1~3のそれぞれの事例について、科学者(専門家)は、政府や行政機関に対してどのような科学的助言を行うべきだったか、もしくはこのような結果になったことは、いたしかたなかったのか。また、科学者(専門家)は、国民に対して直接的に何かを訴えるべきだったのか、についてレポートを

作成。

3 日目

「問 2」 への見解の作成（個人 or グループの作業時間）

「問 2」 についてのグループディスカッション

「問 2」 に関する発表・全体ディスカッション

全体ふりかえりと最終レポート課題の説明

*問 2（抜粋）：問 1 をうけて、COVID-19 をめぐる科学者（専門家）の情報発信のあり方について考える。特に、政府の見解と科学者（専門家）の見解に相違がある時、専門家の間でも見解に相違がある時、科学者（専門家）はどこまで、国民に向けた直接的な発信を行うべきか。特に SNS 等を通じた情報発信をどのように行うべきかについて、グループで討議し、合意形成を目指す（部分的に合意が取れない部分は併記可）。



最終発表の時間には、初日に講義をお願いした寿楽浩太教授、そして、平川秀幸教授にコメントをお願いしました。

❖ 京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です(図1)。

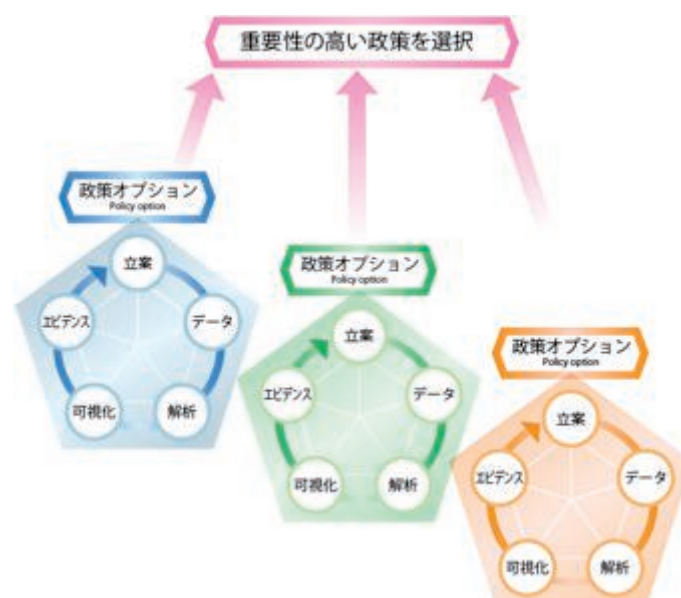


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

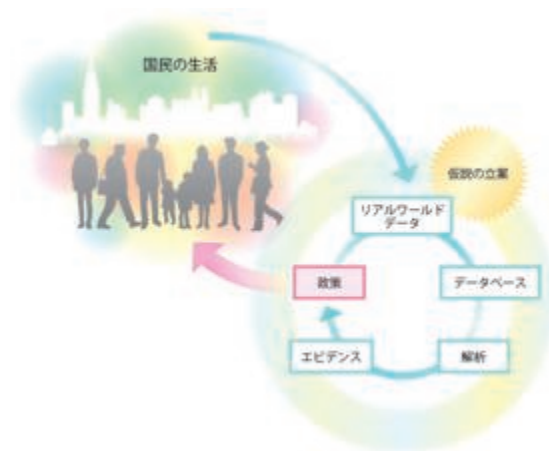


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」 運営状況

研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

2021 年度 在籍者数の合計：6 人

履修者数：3 人（所属研究科内訳 医学研究科：1 人、農学研究科：2 人）

修了者数：2 人（進路内訳 マスメディア：1 人、民間企業：1 人）

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度

履修者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

2018 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：2 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2019 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、農学研究科：2 人、医学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2020 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 公共政策教育部：3 人、医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）

修了者数：3 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、博士課程在学中：2 人）

学際プログラム履修コース（修了要件 8 単位以上）

2021 年度 在籍者数の合計：13 人

履修者数：4 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、農学研究科：1 人、総合生存学館：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 中央省庁：1 人、シンクタンク：1 人、民間企業：1 人、博士課程在学中：2 人、一貫制大学院在学中：1 人、博士課程進学：1 名）

*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2019 年度

履修者数：4 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：2 人、農学研究科：1 人）

修了者数：1 人（進路内訳 博士課程在学中：1 人）

2020 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、情報学研究科：1 人、総合生存学館：1 人、農学研究科 1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、進学：1 人、不明：1 人）

京都大学 開講科目一覧 (2021 年度)

区分	科目名	期間		主担当教員 (研究科)	単位	
		前期	後期			
入門必修科目	現代社会と科学技術 B		○	川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
必修科目	科学技術コミュニケーション演習	通年		川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
連携必修科目	研究プロジェクト	通年		川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
選択科目 (8 単位以上)	選択科目Ⅰ…基礎科目群 (1 科目以上選択)	現代社会と科学技術 A	○		川上 浩司 (医学研究科)、他	1
		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上 浩司 (医学研究科)、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司 (医学研究科)、他	2
		プログラミング演習 (Excel VBA)	○		小山田 耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		経済原論Ⅰ (応用ミクロ経済学)	○		伊藤 順一 (農学研究科)	2
		疫学Ⅰ (疫学入門)	○		中山 建夫 (医学研究科)	1
		医薬政策・行政		○	川上 浩司 (医学研究科)	1
		公共政策論Ⅰ		○	佐野 亘 (人間・環境学研究科)	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング		○	伊勢田 哲治 (文学研究科)	2
	選択科目Ⅱ…イシュー科目群 (1 科目以上選択)	ビッグデータ分析による問題解決実践	○		小山田耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		政策のための研究方法論	○		カール・ベッカー (学際融合教育研究推進センター)	2
		文献評価法	○		中山 建夫 (医学研究科)	1
		情報社会論	○		大手 信人 (情報学研究科)	2
		可視化シミュレーション学		○	小山田耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司 (医学研究科)	1
		応用経済学		○	依田 高典 (経済学研究科)	2
		医療政策の ELSI		○	カール・ベッカー (学際融合教育研究推進センター)	2
		健康情報学Ⅰ		○	中山 建夫 (医学研究科)	2
		共生社会環境論演習 3 B		○	佐野 亘 (人間・環境学研究科)	2
		現代社会論演習 IA	○		広井 良典 (こころの未来研究センター)	2
		現代社会論演習 IB	○		広井 良典 (こころの未来研究センター)	2
		Fin Tech 概論	○		岩下 直行 (公共政策大学院)	2
		デジタルガバメント論	○		岩下 直行 (公共政策大学院)	2
まちづくりとまち経営		○	要藤 正任 (経営管理大学院)	2		

🍁 京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術 A」（前期 木曜 1 限）、「現代社会と科学技術 B」（後期 木曜 4 限）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度より体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2021 年度の「現代社会と科学技術 A」と「現代社会と科学技術 B」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術 A」

第 1 回（2021 年 5 月 13 日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）

大学における学問とは？分野融合・越境のダイナミクス

第 2 回（2021 年 5 月 20 日） 小山田 耕二（京都大学 教授）

科学的方法について

第 3 回（2021 年 5 月 27 日） カール・ベッカー（京都大学 教授）

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 4 回（2021 年 6 月 3 日） 田淵 敬一（文部科学省研究開発局宇宙開発利用課 課長補佐）

社会と科学の関わり方

第 5 回（2021 年 6 月 10 日） 岩下 直行（京都大学 教授）

ビットコインにおける非中央集権の理想と現実

第 6 回（2021 年 6 月 19 日） 全教員

9 期生研究課題発表会

第 7 回（2021 年 6 月 24 日） 要藤 正任（京都大学 教授）

まちづくり・地域づくりとソーシャル・キャピタル

第 8 回（2021 年 7 月 1 日） 南 真祐（京都大学 准教授）

科学技術・イノベーション政策等について

第 9 回（2021 年 7 月 8 日） 荒川 裕司（京都大学 講師）

高騰する薬剤費と医療保険制度

第 10 回（2021 年 7 月 15 日） 全教員

研究プロジェクト中間発表会

「現代社会と科学技術 B」

- 第1回（2021年10月7日） 川上 浩司（京都大学 教授）
健康福祉政策と情報の利活用
- 第2回（2021年10月14日） 小山田 耕二（京都大学 教授）
データ可視化と政策立案
- 第3回（2021年10月21日） 全教員
研究プロジェクト中間発表会
- 第4回（2021年10月28日） 伊勢田 哲治（京都大学 准教授）
クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会
- 第5回（2021年11月4日） 佐野 亘（京都大学 教授）
価値の対立と合意形成
- 第6回（2021年11月11日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）
責任ある研究・イノベーションとは何か
- 第7回（2021年11月18日） 大手 信人（京都大学 教授）
森林の生態系サービスと政策
- 第8回（2021年11月25日） 依田 高典（京都大学 教授）
[政策のための科学] の計量書誌データ分析
- 第9回（2021年12月2日） 伊藤 順一（京都大学 教授）
日本型直接支払制度の政策評価とその方法
- 第10回（2021年12月9日） 広井 良典（京都大学 教授）
持続可能性と人口減少社会のデザイン
- 第11回（2021年12月16日） 中山 健夫（京都大学 教授）
医療の経済評価：その現状と課題
- 第12回（2021年12月23日） 後藤 励（慶應義塾大学 准教授）
医療費の増加と医療技術評価
- 第13回（2022年1月6日） 富田 直秀（京都大学 名誉教授）
質の評価：アートの視点から
- 第14回（2022年1月13日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）
移植医療の社会的価値
- 第15回（2022年1月20日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）
振り返りワークショップ

合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」(集中講義(夏))

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点(政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学)の拠点間共同プログラムの一つである SciREX サマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしてきました。本年度はサマーキャンプがオンラインでの開催となったため、フォローアップを行うために事前ワークショップだけでなく事後ワークショップも実施しました。この事前・事後ワークショップは、京都大学と一緒に実施しています。

事前ワークショップは、8月27日(金)17:00~19:00の日程で大阪大学と京都大学合同で実施しました。STiPSでこれまで学んできたことを共有するところから始まり、SciREX サマーキャンプに期待することを共有し、各グループの準備状況などの情報交換を行いました。

その1週間後、9月3日(金)からサマーキャンプに参加しました。9月3日から5日にかけてのサマーキャンプはオンラインで開催され、大阪大学からは学生6人と教員6人、京都大学からは学生8人と教員3人が参加しました。

事後ワークショップは、9月10日(金)17:00~19:00に実施しました。前半ではサマーキャンプでの様子や得ることができたことを共有し、後半はサマーキャンプをより良いものにするために意見を出し合いました。

サマーキャンプのプログラムに関しては、「SciREX 事業への参画(本冊子44ページ以降)」で詳しくご紹介しています。

「研究プロジェクト」(通年)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2021年度の合同発表会は、2021年12月4日にオンラインにて、大阪大学5人と京都大学4人の合計9人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2021年度 (口頭発表会:2021年12月4日 オンラインにて実施)

大阪大学

- (1) 環境除染目的の日用品に対する日本のガバナンスの特徴と課題—除菌を騙る製品はなぜ流通するのか—
- (2) スタートアップ・エコシステム拠点形成における大学の役割—大阪大学の取り組みを例に—

- (3) 宇宙科学・探査プロジェクトの政策過程—深宇宙探査技術実証機 Destiny+計画を例に—
- (4) 中等教育の場で理科教員が教える地学の現状と支援に向けた提案
- (5) 化学系研究室における学生の学習過程の調査—正統的周辺参加論の枠組みから—

京都大学

- (1) 日本における都市部高齢者の Aging in Place 実現へ向けたボランティア活動奨励制度の検討
- (2) 日本の自粛政策の経済的コストと損失余命
- (3) 日本企業に就職した元留学生の直面する日本語コミュニケーション上の問題—中国人留学生を対象に—
- (4) 鉄道における時間帯別運賃政策の国際比較研究—日本版時間帯別運賃政策に向けて—

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013 年度 (口頭発表会：2014 年 2 月 19 日 大阪大学豊中キャンパスにて)

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム—「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

2014 年度 (口頭発表会：2015 年 2 月 14 日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 —エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション —人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 —先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察 —NL マークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 —福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 —習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR —企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 —社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 —医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床—応用—への実現に関する調査研究—
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定—選択型実験による接近—
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 —レセプトデータベースを用いた疫学的研究—

2015年度（口頭発表会：2016年2月13日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望—大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として—
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化—科学技術社会論と古典的自由主義の融合—
- (3) 日本における核融合研究と政策—歴史、現状、そして今後に向けて—
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて—DNA型証拠と足利裁判—
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査—大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認—

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析—大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える—
- (2) 問題解決における現場地の重要性—自転車シェア事業を手掛かりに—
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望—新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に—
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016年度（口頭発表会：2016年12月10日 大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準—若手研究者に対する探索的調査—
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争—日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて—
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について—物理分野を中心に—
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察—ユーザー参加の視点から—
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較—過去の河川計画を例として—
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方—偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」—

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策—奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に—
- (4) 自治体議員の研修に関する考察—評価グリッド法を用いた分析—
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017年度（口頭発表会：2017年12月9日 京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識

- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 —文献調査とインタビュー調査による探索的研究—
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 —因果関係の判定条件と規範的・価値的含意—
- (4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 —現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて—
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 —サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について—

京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 —韓国の全国紙の社説を中心に—
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 —大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討—
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 —福島第一原子力発電所事故を例に—
- (4) 地域公共交通改革の事例分析 —地域の持続的な移動手段確保に向けて—
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究 —健康保険証発行に併せた—斉通知の実現可能性を探る—

2018年度 (口頭発表会：2018年12月8日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 大学におけるデュアルユース研究 —「対話ツール」を利用した学生との議論—
- (2) “個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査 —兵庫県を事例として—

京都大学

- (1) 指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴 —文献検索数を用いた記述研究—
- (2) 福祉政策による社会環境変化と精神障害者の QOL との関連 —統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究—
- (3) 塩酸リトドリンの早産予防効果 —データベースを用いた検討—
- (4) 市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討 —サイエンスカフェの事例分析から—

2019年度 (口頭発表会：2019年12月14日 京都大学芝蘭会館別館にて)

大阪大学

- (1) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討—革新的研究開発推進プログラム (ImPACT) を題材として—
- (2) 生命倫理への関心度の決定要因—情報収集行動を中心に—
- (3) 博士課程進学を選択する要因の調査—大阪大学大学院生命機能研究科における事例から—
- (4) 原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響—大阪大学大学院工学研究科を対象として—

京都大学

- (1) 京都市営バス路線ネットワークの最適化
- (2) 農業輸出における行政の役割と課題

2020年度 (口頭発表会：2020年12月12日 オンラインにて)

大阪大学

- (1) 日本のスマートシティ関連事業における府省庁連携—中央府省庁と地方自治体の視点から—
- (2) 高度教養教育に関する学習動機の分析—大阪大学高度副プログラムにおける調査から—
- (3) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程—戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)を事例として—
- (4) プラスチック資源循環の実現に向けた課題の検討—レジ袋有料化を事例として—
- (5) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)における台湾政府と市民の科学コミュニケーション—記者会見のインターネットライブ中継に伴う課題—
- (6) 科学に関する市民参加の課題と、その解決に向けた実践形態の模索—大阪 NO₂一斉測定運動を事例に—
- (7) 要介護・要支援認定における医学的評価の在り方—主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析—

京都大学

- (1) 外国人介護人材向けの介護のテキストの量的分析—介護現場での円滑なコミュニケーションを目指して—
- (2) 日本における女性の出産施設選択の嗜好—システムティックレビュー—
- (3) 多職種連携@精神科—質向上サイクルワーク—
- (4) 「見守り活動」への学生参加を増やせるか?—京都市と草津市の事例を対象に—
- (5) 農業大学校における環境保全型農業の実践についての提案—SDGsの達成を目指して—

「研究プロジェクト」の発展

「研究プロジェクト」で取り組んだ内容をもとに学術論文として発表する取り組みも行われています。今年度は下記の3件が学術誌に掲載されました。

藤原里英子. 2022. 「要介護・要支援認定における医学的評価の在り方：主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析」『Co*Design』, 11: 155-179, 2022年2月.

Sakamoto K, Akishiba M, Iwata T, Arafiles JVV, Imanishi M, Futaki, S. 2021. Use of homoarginine to obtain attenuated cationic membrane lytic peptides. *Bioorg Med Chem Lett.* 40:127925. 2021年5月.

Iwata T, Hirose H, Sakamoto K, Hirai Y, Arafiles JVV, Akishiba M, Imanishi M, Futaki, S. 2021. Liquid Droplet Formation and Facile Cytosolic Translocation of IgG in the Presence of Attenuated Cationic Amphiphilic Lytic Peptides. *Angew Chem Int Ed Engl.* 60(36):19804-19812. 2021年9月.

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術 B」において、大阪大学の平川秀幸教授が、選択科目「医療政策の ELSI」において、加藤和人教授が講師を務めました。

また、大阪大学の入門必修科目「社会の中の科学技術概論」において伊勢田哲治准教授が講師を務めました。

❖ 阪大学生の声

現場の話を聞くことで実社会と理論の関係を深く考えることができました。

藤原 茉唯さん（人間科学研究科 人間科学専攻 博士前期課程 2年）

私がSTiPSを履修しようと思ったのは、理論と実社会の間の接点を得たいと思ったからです。「研究プロジェクト」では、環境除染目的の日用品に対する日本のガバナンスの特徴と課題をテーマとし、現場の方にインタビューしました。私は規制や法令の解釈変更が効果的な対策になると考えていたのですが、インタビューをとおして、行政コストがかかり簡単には規制できないということや、この法令で運用してきた歴史的経緯があり解釈の変更が難しいということを知りました。理論では説明しきれない複雑で難しい力学のようなもので現場が維持されていることを実感しました。



修士論文の執筆において先行研究の理論を批判するとき、ここがこういう点で現実から浮いている、現実から浮かないようにするためにはこの視点を入れないといけない、と考えられるようになったのは、STiPSでの学びがあったからです。私は大学院卒業後、IT系企業でコンサルタントとして働くことが決まっています。今後も実社会と理論が重なるところ、重ならないところに関心を持ち続け、現場のひとの葛藤に寄り添うようなコンサルタントになりたいと思っています。

自分の専門分野を軸に幅広い知識を吸収し興味を広げることができました。

戒能 匠さん（工学研究科 電気電子情報通信工学専攻 博士前期課程 1年）

就職活動を経験し、自分自身が社会に出て何をしたいのか考えるようになったことがきっかけで、STiPSの授業を受講しました。授業では、自分の専門の研究では触れることのない文献が課題として出され、一度読むだけでは理解しきれず、分からない部分はひとつひとつ調べ何度も読みました。その過程で「科学技術コミュニケーション」という分野の知識が大きく広がった実感があります。正直にいうと、僕は学部生のころ、教養の授業を受けて「これが役に立つのだろうか」「もっと自分の専門分野に近い知識の方が役に立つのに」と思ったことがあったのです。研究室に所属して間がない頃も、やらないといけないこと、理解しないといけないことを吸収するのに精一杯で、他の分野について学ぶ余裕がありませんでした。でも今、自分の専門の研究がすすむにつれ、教養の重要性に改めて気づきはじめています。



将来は、科学技術が世の中に浸透していくプロセスに関わりたいです。STiPSがテーマとしている「つなぐ人材」として、科学技術が社会実装されるときに生まれる感動や驚きをひとびとに提供できる存在になりたいと思っています。

専門家として何ができるか今までとは違う視点を持つことができました。

山口 友菜さん（基礎工学研究科 物質創成専攻 博士前期課程 1年）

STiPS の授業は、今社会で起きている科学技術に関する問題を扱い、受講生同士で自分の考えを話す機会や、その問題に実際に関わっている専門家の方からお話を聞く機会が多くあり、実践的です。私は特に「メディアリテラシー」が印象に残っています。「社会問題を切り取り、それを扱う番組を企画する」という課題に取り組み、いつもとは全く違う視点でテレビ番組という身近なものを見るのは、とても新鮮な体験でした。

将来は、社会に寄り添うことができる専門家になれば、と考えています。きっかけは、数年前のレジ袋有料化です。私の専門分野は有機化学で、この分野における技術発展が社会に貢献してきたと考えていたので、この政策が実施されて複雑な心境でした。科学技術に関することが十分に社会に伝わっていないという「溝」のようなものを感じていました。今は、STiPS で学んだことをとおして、科学技術の専門家の側も、社会の側も、両方が最善を尽くそうとした結果がこのような政策に結びついている、ということが分かります。私自身の問題意識は間違えていなかったと思いましたし、社会に出てからも考え続けていきたいです。



❖ 京大学生の声

「政策」にも「データ」にもあまり縁のない研究をしている人もぜひ STiPS へ

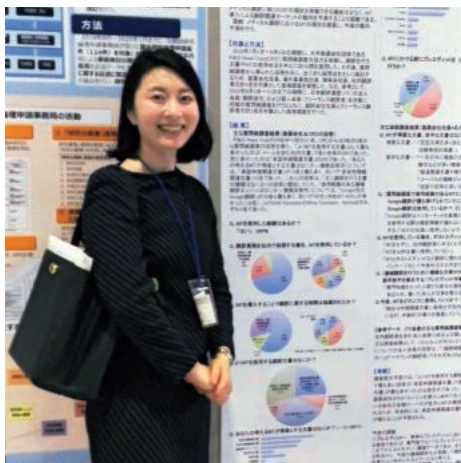
高木 佑透さん（人間・環境学研究科 共生人間学専攻 修士課程 2年）

STiPSには様々な分野の先生方と院生が集まっており、自らに近い分野を専門にしている人々に対して研究を説明する際にはまた違った説明が求められます。「問題は何か」、「その問題はなぜ問題なのか」、「その問題の原因は何か」、「その原因の解決のために、自らの研究はどのように貢献できるのか」、「問題を解決した結果、何がもたらされるのか」……お互いに分野が異なるからこそ、STiPSでは自らの研究の意義を分かりやすく伝えることが要求され続けるのです。これは学術的な場に対してではなく、社会一般に対しての言葉を持つための充実した訓練になったと感じています。私の主専攻は障害学と質的心理学、そして映画制作です。採用している方法論の大まかな分類としてはフィールドワークやインタビュー調査、そして映画であり、いわゆる質的研究的な方法になります。いずれも「定量的なエビデンス」やEBPMとはあまり縁のない研究をしているからこそ、多様なSTiPSメンバーとの合宿や、多分野の先生方から厳しい指摘をもらえる研究プロジェクトは、自らの研究を異質な他者に伝える力を与えてくれたように思います。先生方からは親切で鋭いコメントをいつもいただけますし（私はとりわけベッカー先生と祐野先生にお世話になりました）、一見「政策」にも「データ」にも縁のない研究に取り組んでいる人に対してもSTiPSはおすすめできます。



主専攻だけではもったいない！ STiPS でつなげる自分と社会

小泉 志保さん（医学研究科 社会健康医学系 修士課程 2年）



大学院生となる前は医学翻訳者として働きながら長年NPOの活動に関わってきました。そのため、「社会とつながる人材」というキャッチコピーに興味をもち、STiPSの学際プログラム履修コースに参加することにしました。また、久しぶりに学生生活を送るなら医学系の授業だけでなく幅広い科目を履修したいという気持ちもありました。実際に参加してみると、様々なステークホルダーが存在する政策・社会問題を解決するためにどうすればよいか、iPS研究所から街づくりまで幅広い分野の一流の先生方や他分野の学生たちとディスカッションすることができ、目から鱗の連続でした。アウトプット重視で毎回の講義にも楽しく参加していました。政策にかかわらず、将来なんらかの社会問題の解決

に取り組みたいと思っている方にはお勧めのコースです。また一方で、尊厳死や臓器移植といった倫理的問題などについても系統立てて学ぶことができました。科学的な分析だけでなく哲学的な問いに対して知を深めることができるのも STiPS の特徴です。最終的に主専攻の研究でも STiPS で得た知識が大変役に立ちました。STiPS で得た先生方や学生とのつながりもなにより貴重な財産です。

未知との遭遇の連続

沙々木 祐斉さん（公共政策教育部 公共政策専攻 修士課程2年）

私は元々エビデンスに基づいた政策立案や、様々な政策分野における問題解決能力・政策形成過程に興味があったことから STiPS に参加しました。コースは研究プロジェクト修了コースです。

このような動機や研究プロジェクトに関して、STiPS に参加して良かったと思える点が大きく2つあります。それは幅広い政策知識の獲得と研究論文執筆・発表能力です。STiPS では様々な分野の先生方（研究者や実務家）が所属しており、それらの先生方のリレー講義を受講できるため、幅広い政策分野の知識を得ることができました。また、これまでの学生生活では、論文執筆能力やプレゼン能力は研究室のノウハウに依存していましたが、STiPS 提供の授業において初めて時間を取り、体系立てて論文執筆の素養やプレゼンの方法を学ぶことができました。この経験は大きく、この先アカデミアに残らなくとも重宝するスキルであると考えます。

ただ、STiPS においてやり残したことがあるとすれば、もっと積極的に STiPS 所属の様々な先生方と自身の研究やその他政策に関してディスカッションすれば良かったということです。前述のように STiPS には様々な教員が参加しており、STiPS 所属の学生でなければこのような機会には恵まれないからです。今後 STiPS へ参加する学生がいたら、この機会をぜひ大切にしてほしいと思います。



🍷 STiPS 修了生ネットワーキング

STiPS 修了生と現役生との交流（大阪大学）

2021年度は、大阪大学では修了生と現役生の意見交換が活発に行われました。「研究プロジェクト」の実施過程では3人の修了生が、それぞれ3件の「研究プロジェクト」においてアドバイスをを行いました。

また、秋～冬学期開講科目「研究手法入門」では2人の修了生が、インタビューの実習を行う回にインタビューとして協力しました。なお、この2人は大阪大学 CO デザインセンターの招へい研究員としても活動しています。

研究プロジェクト進捗報告会（京都大学）

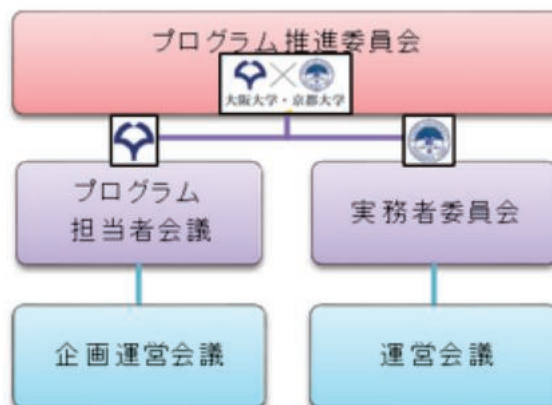
2021年6月19日（土）15時より、京都大学の8期生・9期生の研究プロジェクト進捗報告会及び懇親会を3人の修了生参加の下、実施しました。Zoomを活用したオンライン形式での実施により、関東や東北地方に在住する修了生が参加し、現役生の研究プロジェクトにコメントを寄せてくれました。進捗報告会終了後の懇親会では、ブレイクアウトルームに分かれて、修了生の近況報告や現役生との交流を行いました。

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012年より、毎年3回から4回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2021年度は計3回（6月2日、8月25日、3月にメール審議）実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプなどの拠点間同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にCOデザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

❖ アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。

第二期アドバイザー・メンバーは下記の5名です。

- ・村尾 和俊 NTT 西日本 相談役
- ・五十嵐 仁一 ENEOS 総研株式会社 代表取締役社長
- ・元村 有希子 毎日新聞社 論説委員
- ・大岡 敏孝 衆議院議員 自民党
- ・熊野 正士 参議院議員 公明党

2021年度はアドバイザー会議を開催しませんでした。メールや書面等で第2期中間評価結果や年次活動の報告、任期延長手続き等を行いました。

❖ カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGOなどの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新たに追加した科目数は9となりました。2015年度の開講科目数は29、2016年度の開講科目数は32でした。2017年度には、4学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は36になり、2018年度の開講科目数は37、2019年度の開講科目数は40、2020年度の開講科目数は40でした。そして、2021年度の開講科目数は39でした。京都大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は22、うち新設科目数は5でしたが、2014年度の開講科目数は1科目追加して23科目となり、2015年度の開講科目数は23、2016年度の開講科目数は25、2017年度の開講科目数は23、2018年度の開講科目数は27、2019年度の開講科目数は28、2020年度の開講科目数は30、そして2021年度の開講科目数は27でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件14単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013年3月27日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっていきます。

❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	実施形態／ 場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第 80 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」 第 1 回 日本科学未来館／科学ライター・詫摩雅子さん	2021 年 6 月 22 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 81 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」 第 2 回 株式会社メルカリ R4D・藤本翔一さん	2021 年 6 月 29 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 82 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」 第 3 回 京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA） 上廣倫理研究部門・三成寿作さん	2021 年 7 月 6 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 83 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」 第 4 回 JST 社会技術研究開発センター（RISTEX）・濱田志穂さん	2021 年 7 月 13 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 84 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」 第 5 回 株式会社電通 ソリューション・デザイン局・朱喜哲さん	2021 年 7 月 20 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 85 回 STiPS Handai 研究会】	2021 年 6 月 28 日	ハイブリッド形式（オ	主催：STiPS

シリーズ科学技術×公共政策（2021年度夏）第1回 サイバー空間利用と安全保障		オンライン&対面)	共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。
【第86回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2021年度夏）第2回 宇宙と国際政治—NASDA/JAXAでの実務を通して—	2021年 7月12日	ハイブリッド形式（オンライン&対面)	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。
【第87回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2021年度夏）第3回 日本の公共政策の現場—行政と官僚を考える—	2021年 7月29日	ハイブリッド形式（オンライン&対面)	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催。
【第88回 STiPS Handai 研究会】 放送のプロフェッショナルと社会を考える（2021年度）	2021年 11月4日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「メディアリテラシー」の一環として開催。
【第89回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021年度冬）」 第1回 日本科学未来館・森田由子さん	2021年 12月14日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第90回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021年度冬）」 第2回 JST 研究開発戦略センター（CRDS）・嶋田義皓さん	2021年 12月21日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第91回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021年度冬）」 第3回 一般社団法人 SiCP／中外製薬株式会社 デジタル戦略推進部・桑子朋子さん	2022年 1月19日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。

【第 92 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」 第 4 回 静岡科学館る・く・る 代島慶一さん	2022 年 1 月 18 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 93 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」 第 5 回 サイエンスライター／科学コミュニケーター 堀川晃菜さん	2022 年 1 月 25 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術と科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 94 回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2021 年度冬）第 1 回 原子力政策をめぐる政治過程	2021 年 12 月 16 日	ハイブリッド形式（オンライン&対面）	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催。
【第 95 回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2021 年度冬）第 2 回 日本の科学技術イノベーション政策	2022 年 1 月 13 日	ハイブリッド形式（オンライン&対面）	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「公共政策 B」の一環として開催。
市民参加型ワークショップ			
市民参加型ワークショップ「それって高すぎる？～フリマアプリ時代の売買の倫理～」	2021 年 7 月 30 日、31 日	オンライン 形式	主催：STiPS、大阪大学 社会技術共創研究センター 共催：大阪大学 CO デザインセンター
共進化実現プログラム（第 II フェーズ）の一環として開催			
市民ワークショップ「研究開発領域を創出するための近未来対話」	2021 年 9 月 23、25、26 日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現プログラム「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」

社会課題専門家ワークショップ「研究開発領域を創出するための近未来対話」	2021年 10月15日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現プログラム『『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創』
-------------------------------------	-----------------	-------------	--

3. SciREX 事業への参画

3. SciREX 事業への参画

🍷 サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。2021年度は新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大している状況を受け、Zoomなどを用いたオンラインでの開催となりました。

2021年度

実施日：2021年9月3日から5日

会場：オンライン開催

主催拠点：政策研究大学院大学、一橋大学

参加者数：大阪大学からは学生6人と教員6人、京都大学からは学生8人と教員3人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013年度

実施日：2013年8月23日から25日（事前ワークショップは、8月21日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7人と教員3人、京都大学からは学生6人と教員5人

2014年度

実施日：2014年8月31日から9月2日（事前ワークショップは、8月27日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7人と教員9人、京都大学からは学生9人と教員6人

2015年度

実施日：2015年8月21日から8月23日（事前ワークショップは、8月19日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員4人および学生7人、京都大学からは学生5人と教員4人

2016年度

実施日：2016年9月15日から17日（事前ワークショップは、9月9日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生8人と教職員5人、京都大学からは学生10人と教員5人

2017年度

実施日：2017年8月20日から22日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生5人と教員5人、京都大学からは学生6人と教員3人

2018年度

実施日：2018年8月28日から30日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生6人と教員4人、京都大学からは学生4人と教員5人

2019年度

実施日：2019年8月26日から28日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生14人と教員5人、京都大学からは学生6人と教員5人

2020年度（中止）

予定されていた実施日：2020年9月17日から19日

予定されていた会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

主催拠点：政策研究大学院大学、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2021年度の体制

主催：SciREX 基盤的研究・人材育成拠点

幹事校：政策研究大学院大学／一橋大学

2021年度のテーマ・趣旨（プログラムより）

「After コロナ時代のイノベーションシステム」

社会はどのように変化するのか(人・物の動き、国際関係・・・)

研究はどのように変化するのか(学会活動、共同研究、AIなどの研究への導入・・・)

教育はどのように変化するのか(講義のあり方、学生活動・・・)

学習のねらい（プログラムより）

- ・全拠点の学生や教員が一堂に参集し、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築します。
- ・多様なバックグラウンド・視点を持つ参加者と将来ビジョン・シナリオを議論することにより、科学技術イノベーションと経済、社会の関わりを大局的かつ多層的な視点から学びます。
- ・複数の将来ビジョン・シナリオを共有した上で、テーマごとに政策担当者や実務家へのヒアリング等を

行ない、エビデンスに基づいた具体的な新規政策プランの作成を実践的に行います。

サマーキャンプのプログラム

	9月3日(金)	9月4日(土)	9月5日(日)
午前	12:45- 受付開始	9:00-12:10 グループワーク グループごとに集合し、サイトビジットやディスカッション	9:00-12:10 グループワーク 最終発表に向けての準備
午後	13:00-13:35 オリエンテーション 挨拶、事業紹介、拠点からの挨拶等、 全体説明 13:35-15:15 全体講演 13:35-13:40 インTRODクション 司会：青島矢一（一橋大学） 13:40-13:55 「第6期科学技術・イノベーション基本計画において目指すべき社会像」 講師：中澤恵太（文部科学省） 13:55-14:55 「脳科学で心の不安に打ち克つ：スタートアップの経験」 講師：川人光男（ATR脳情報通信総合研究所） 14:55-15:15 「学生、教職員も含めた質疑応答・インタラクション」 ディスカッション：川人光男（ATR脳情報通信総合研究所）、中澤恵太（文部科学省）、青島矢一（一橋大学）、隅藏康一（GRIPS） 15:20-18:00 グループワーク グループ毎に分かれ、ヒアリングやディスカッション 19:00-20:30 懇親会	13:00-13:30 中間発表 14:40-15:00 講演「政策立案はどうあるべきか(仮)」 奥篤史（文部科学省） 15:00-15:15 講演「ビジネスモデルの構築方法を応用した政策立案のヒント(仮)」 隅藏康一（GRIPS） 15:15-15:30 講演「政策を論理的に説明する(仮)」 安藤二香（GRIPS） 15:30-15:45 質疑 奥篤史（文部科学省）、隅藏康一（GRIPS）、安藤二香（GRIPS） 16:10-18:00 グループワーク グループ毎に分かれ、ヒアリングやディスカッション	13:00-14:10 最終発表会① 14:30-17:10 最終発表会② 17:30-18:00 閉会式 講評、表彰、閉会挨拶

グループワーク（プログラムより）

Topic1 ポストコロナを見据えたライフスタイルイノベーションによる持続可能な脱炭素社会の実現

ファシリテーター：諸賀 加奈（九州大学）

教職員：小林 俊哉（九州大学）

Topic2 アフターコロナ時代の研究者による政策への関与のあり方

ファシリテーター：黒河 昭雄（JST-RISTEX）

教職員：森川 想（政策研究大学院大学/東京大学）

Topic3 COVID時代のスペースアプリケーション

ファシリテーター：ヴェルスピレン カンタン（東京大学）

教職員：小泉 秀人（一橋大学）

Topic4 ミッション志向型イノベーション政策立案のためのロードマッピング

ファシリテーター：木見田 康治（東京大学）

教職員：平川 秀幸（大阪大学）

Topic5 COVID-19の経験に基づく今後の感染症対策

ファシリテーター：カール・ベッカー（京都大学）

教職員：渡邊 浩崇（大阪大学）、祐野 恵（京都大学）、鈴木 千賀（九州大学）

Topic6 データで解析する科学技術イノベーション

ファシリテーター：池内 健太（政策研究大学院大学）

教職員：小柴 等（NISTEP）、佐々木 達郎（政策研究大学院大学）

Topic7 ポストコロナの教育

ファシリテーター：谷口 諒（一橋大学）

教職員：青島 矢一（一橋大学）

Topic8 COVID-19の経験からの国際関係と国際コミュニケーションのあり方

ファシリテーター：李 孝連（一橋大学）

教職員：江藤 学（一橋大学）

Topic9 現代の国富論ーバンデミック、第4次産業革命下の経済成長の鍵となるAIガバナンス

ファシリテーター：ブルーマ マシュー（政策研究大学院大学）

教職員：飯塚 倫子（政策研究大学院大学）

❖ 他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が2021年7月3日には政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラムが提供する科目「科学技術イノベーション政策概論」において、科学技術の社会的ガバナンスについて論じました。2021年10月23日には、九州大学 STI 政策専修コースが提供する科目「科学技術社会論概説」において、STiPS の教育カリキュラムを紹介した上で、科学技術社会論（STS）について論じました。2021年12月1日には、東京大学 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット（STIG）が提供する科目「事例研究（科学技術イノベーション政策研究）」において、科学技術と社会について論じました。

❖ コアコンテンツ作成、行政官研修などへの講師派遣

「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツの作成として、これまでに主に第3章「科学技術イノベーションと社会」の執筆を担当しましたが、コアコンテンツ編集等に引き続き参加しました。

2022年1月19日に行われた科学技術イノベーション政策に関する行政官研修には大阪大学の小林傳司名誉教授が講師として参加し、科学技術イノベーションと社会、ガバナンスについての講演と議論を行いました。

2022年2月21日に文部科学省・SciREX ブラウンバックセミナーにおいて、大阪大学の工藤充特任講師と水町衣里特任講師が「「共創」のカギとしての科学技術コミュニケーション」と題する講演を行いました。

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様なテーマで研究会を実施してきました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2021 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

STiPS Handai 研究会（シリーズ 科学技術×公共政策）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

本シリーズは、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーです。科学技術の進展が人々の生活や社会に幅広い影響をもたらす現代において、科学技術に関する公共政策はどのような特徴があり、どのように立案、決定、実施、そして評価されるのか。人文科学、社会科学、自然科学などの専門を問わず、科学技術だけでなく公共政策に対する理解が求められています。科学技術に関する公共政策について、文系理系の両方の観点から考えました。

第 85 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2021 年度夏） #1 サイバー空間利用と安全保障
- ゲスト：橋本 靖明（防衛省防衛研究所 主任研究官（前 政策研究部長））
- 日時：2021 年 6 月 28 日（月） 15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2021 年 6 月 28 日（月）に、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2021 年度夏）」を開催しました（授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催）。

この日は、講師や司会進行、授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、参加者の多くはオンライン参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 18 人が参加しました。



シリーズ第 1 回「サイバー空間利用と安全保障」は、防衛省防衛研究所主任研究官（前 政策研究部長）の橋本靖明さんをお迎えし、サイバー空間の諸問題について、公共政策や国際政治、国際法の観点から、ご自身の実務・研究経験に照らして幅広くお話しいただきました。

研究会の前半は、サイバー攻撃が国際社会で具体的にどのように発生しているか、そして、その攻撃に対して日本政府を含めた各国政府がどのように対応しているかを解説していただきました。後半は質疑応答とディスカッションを行いました。「日本はデジタル庁を創設し、デジタル化を推進しようとしているが、サイバー防衛は大丈夫なのか」や「サイバー攻撃に対しては核抑止のような抑止が可能なのか」といった参加者からの質問に、橋本さんから丁寧にお答えいただきました。

終了後には、参加者から「サイバー攻撃に関して、その道の第一人者の方のお話を聞くことができ、貴重な機会でした」などの感想が寄せられました。（*実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）。

STiPS ウェブサイト（<http://stips.jp/20210628/>）に開催レポートを掲載しています。

第 86 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2021 年度夏） #2 宇宙と国際政治—NASDA/JAXA での実務を通して—
- ゲスト：佐藤 雅彦（宇宙航空研究開発機構（JAXA） 評価・監査部長）
- 日時：2021 年 7 月 12 日（月） 15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2021 年度夏）」が 2021 年 7 月 12 日（月）に開催されました（授業「科学技術と国際政治 B」の一環として開催）。

6 月 28 日に開催した第 1 回同様、第 2 回「宇宙と国際政治—NASDA/JAXA での実務を通して—」も、講師や司会進行、授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、参加者の多くはオンライン参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 20 人が参加しました。



この日のゲストは、宇宙航空研究開発機構（JAXA）評価・監査部長の佐藤雅彦さん。JAXA とその前身の宇宙開発事業団（NASDA）で関わっていらっしゃったお仕事と、宇宙政策、宇宙法、そして国際政治との関連性について、幅広くご紹介いただきました。

研究会の前半は、日本の宇宙関連の法制度形成に何度も携わったというユニークなご経験や、世界の宇宙法および宇宙政策の進展、日本の宇宙政策についてお話いただきました。後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは様々な質問が出されました。例えば「日本の偵察衛星にはどのような役割があるのか」や「冷戦時代とは異なり、アメリカとロシア以外の国も宇宙進出を果たしているが、どのような規制があるのか」、「国際宇宙ステーション内の犯罪はどう処罰されるのか」といった質問でした。それぞれ佐藤さんから丁寧にお答えいただきました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました（*実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）。

- ・宇宙政策は国際政治と密接に関わっていることが分かりました。
- ・諸外国の宇宙機関の予算、宇宙活動に関する国際ルールなどの資料から、宇宙開発をめぐってさまざまな議論が行われているということが分かりました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210712/>) に開催レポートを掲載しています。

第 87 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2021 年度夏） #3 日本の公共政策の現場—行政と官僚を考える—
- ゲスト：百嶋 計（追手門学院大学経営学部 教授、元 財務省・造幣局理事長）
- 日時：2021 年 7 月 29 日（木）17:00～19:00
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2021 年度夏）」は、授業「科学技術と国際政治 B」の一環として実施してきました。今シーズン最終回にあたる第 3 回「日本の公共政策の現場—行政と官僚を考える—」が 2021 年 7 月 29 日（木）に開催されました。

第 1 回、第 2 回同様、講師や司会進行、参加者の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、その他はオンラインでの参加となりました。大阪大学の学生や教職員など計 12 人が参加しました。



今回のゲストは、追手門学院大学の百嶋計さんでした。財務省の官僚として予算編成や通貨行政に関わった経験、また内閣官房・内閣府で経済構造改革・行政改革・公務員制度改革に関わった経験など、さまざま実務経験を紹介していただきました。

研究会の前半では、ご自身のキャリアの中で対応に当たった具体的な案件や事件を、臨場感あふれる形で分かりやすくお話しいただき、科学技術政策のトピックも交えながら、官僚組織の特徴や、それが抱える問題について講演いただきました。

後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは、「若者の官僚志望者数が減少するなかで、どのように官僚という仕事の魅力を伝えるべきか」という質問や、「官僚組織をはじめ、日本政府は研究者の知見を政策に活かせていないように見える」といった指摘があり、百嶋さんから丁寧にお答えいただきました。

終了後には、参加者から、「制度改革によって、官僚主導から政治主導に大きく変化していたことが印象的だった」といった感想が寄せられました（*実際に届いた文章に編集を加えて掲載していません）。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210729/>) に開催レポートを掲載しています。

第94回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2021年度冬） #1 原子力政策をめぐる政治過程
- ゲスト：上川 龍之進（大阪大学大学院法学研究科 教授）
- 日時：2021年12月16日（木）15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2021年12月16日（木）に、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2021年度冬）」の第1回「原子力政策をめぐる政治過程」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。

この日は、講師や司会進行、授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、その他の参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計6人が参加しました。



大阪大学大学院法学研究科の上川龍之進教授をゲストにお迎えし、戦後日本の原子力政策をめぐる政治過程について、ご自分の研究をご紹介いただきながら、ご講演いただきました。

研究会の前半は、とくに2011年3月の東日本大震災後に起こった福島第一原子力発電所事故の原因について、東京電力とその他の政治アクターの間を明らかにすることでご説明いただきました。後半は質疑応答とディスカッションを行いました。

上川教授が提示された論点、「専門性の高い政策について、国民世論と専門家の賛否が分かれた場合、どのように政策は決められるべきだろうか」や「専門家の意見が一致しない場合、政策の是非について、どのように判断すべきだろうか」ということについて、参加者からは様々な意見や関連した質問が出されました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「原発の利害関係者はさまざまに数も多く、巨額のお金も動き、さらにそれらに専門家や一般市民の意見が加わり、政策決定が容易にできないことがよくわかりました。」

「公共政策の教科書で政策過程を一通り学んだ後、原発という事例に沿ってお話を聞くと、理論でうまく説明できる点がある一方で、理論では対応できない点もあることが実感できました。」

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20211216/>) に開催レポートを掲載しています。

第 95 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ 科学技術×公共政策（2021 年度冬） #2 日本の科学技術イノベーション政策
- ゲスト：赤池 伸一（文部科学省 科学技術・学術政策研究所 上席フェロー）
- 日時：2022 年 1 月 13 日（木）15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2022 年 1 月 13 日（木）に、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2021 年度冬）」の第 2 回「日本の科学技術イノベーション政策」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。

この日は、司会進行と授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、講師とその他の参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計 7 人が参加しました。

文部科学省科学技術・学術政策研究所上席フェローの赤池伸一さんをゲストにお迎えし、科学技術イノベーション政策の体制と最近の動向についてお話しいただきました。



研究会の前半は、日本や諸外国の科学技術イノベーション政策の体制や内容、日本の科学技術イノベーションの国際的ポジション、戦略立案の基礎としてのフォーサイト（予測活動）などについてご説明いただきました。

後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは、「科学技術イノベーションが進んでも、人々の幸福度は上がらないという話があるが、日本政府はどのように考えているのか」といった質問や感想が述べられました。赤池さんからそれぞれ丁寧にお答えいただきました。

終了後には、参加者から次のような感想が寄せられました。

（*読みやすくするために、実際に届いた文章に編集を加えて掲載しています）

「現場の方から直接お話を聞くことができ有意義だった。日本の科学技術イノベーション政策の問題点について、自分が思っていたよりも、現場の方に詳細に理解していただいていることがわかり嬉しかった。」

「ノーベル賞と受賞年齢に関するデータが興味深かった。また、ドイツの科学技術イノベーション政策の体制は基礎研究を行う身として非常に魅力的で、研究所内や大学内で産学官が連携しており、科学以外の視点から科学を見直すよい環境だと思った。」

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20220113/>) に開催レポートを掲載しています。

5. 共進化実現プログラムの実施

5. 共進化実現プログラムの実施

2021年度からは「共進化実現プログラム（第Ⅱフェーズ）」が始まりました。政策担当者と研究者とが対話をしながら研究課題を設定し、共に研究を進めるというものです。このうち3件（共進化実現ステージ2件、共進化準備ステージ1件）に、STiPS 参画教員が関わっています。

❖ 「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創

研究課題名

「将来社会」を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創

プロジェクト期間

2021（R3）年6月～2023（R5）年3月

プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・木見田 康治（東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻 特任講師）

行政担当部署

文部科学省 科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室、人材政策課

取り組む課題

我が国の科学技術政策において、その社会的妥当性（いわゆる正統性（Legitimacy））を担保するための取り組みは限定的です。さらに、異なるミッションの中のどれに取り組むか、研究分野としてどこに注力するかを政策判断するための手法は十分に確立されていません。そのためミッション指向型の研究開発戦略の策定において、ミッションの社会的妥当性の確保と研究成果の最大化を行うための理論的・方法論的基盤を共創的に研究・開発し、行政の戦略策定実務に実装することに取り組みます。

プロジェクト概要

将来社会のビジョンから抽出された重要な社会課題について、研究開発課題と結びつきうる具体的な「ミッション」を設定し、これをもとに研究開発戦略を立案する方法論を開発します。具体的には、研究者側は、木見田康治・東京大学工学系研究科技術経営戦略学専攻特任講師らのチームと連携し、行政側とは、文部科学省 科学技術・学術政策局研究開発戦略課戦略研究推進室、人材政策課を主たる連携先とし、研究成果を同室が R3～4 年度に行う研究開発戦略の立案において活用します。さらに文部科学省 科学技術・学術政策局人材政策課、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)の社会技術 研究開発センター(RISTEX)及び「科学と社会」推進部とも連携して進めます。

2021年度の主たる研究成果

2021年度は、大阪大学を中心に取り組んだミッション設定コンポーネントについては、社会課題の体系的整理に向けて、専門家アンケートやワークショップ（市民ワークショップおよび社会課題専門家ワークショップ）を開催しました。専門家アンケート（実施期間：9月8日～28日）は、文部科学省科学技術・学術政策研究所（NISTEP）科学技術専門家ネットワークを対象とし、送付数1,682名に対して794名から回答があり、これをもとに社会課題の構造解析を行いました。市民ワークショップ（9月23日、25日、26日）には、公募により選定した市民（各回7～8名）が参加し、社会課題専門家ワークショップ（10月15日）は、人文社会学者、企業・NPOの実務者を計14名招いて実施しました。

東京大学によるマッチングコンポーネントについては、文献調査や民間シンクタンク等に対するインタビューとともに、マッチングアルゴリズム実装検討、入力データとなる研究者アンケートを実施しました。研究者と行政官のミーティングは、プロジェクト開始の4月から11月まではほぼ毎週1回程度、それ以降は隔週で開催しました。

🍌 児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用

研究課題名

児童生徒の心と体の健康の保持増進に向けた教育データの活用

プロジェクト期間

2021（R3）年4月～2023（R5）年3月

プロジェクトメンバー

- ・川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）*研究代表者
- ・高見 茂（京都光華女子大学 学長）
- ・吉田 都美（京都大学大学院医学研究科 特定講師）
- ・祐野 恵（京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット 特定助教）

行政担当部署

文部科学省 初等中等教育局健康教育・食育課

取り組む課題

GIGA スクール構想の中で今後集積していく各種の校務情報や、政府方針である PHR 構想の一環として集積される学校健診情報の活用は今後の課題です。しかし、わが国では、学校健診情報及び教育データを結び付けた体系的な分析は行われておらず、これらのデータの集積が教育政策における EBPM を進めるために有効であると示す知見やデータ収集の手順における論点についての検討はなされていません。適切に個人情報管理し、関係者の理解を得て PHR を推進し情報を扱うことは政策課題であり、その解決を目指すことが必要とされています。

プロジェクト概要

学校健診情報を元に、COVID-19の発生による生活様式の変化が学童に与える影響を明らかにし、自治体・教育委員会が保有するデータを用いることで、新たな感染症が発生した際にも有効性の高い政策形成が可能となることを目指します。具体的には、以下の2点を行います。

①新型コロナウイルスの発生による生活様式の変化が学童に与える影響について、学校健康診断情報を用いて明らかにします。

②センシティブデータを利活用する際の自治体における個人情報保護に関する取り組みを調査し、課題の整理を行います。

2021年度の主たる研究成果

令和3年度においては、2カ月に一度、健康教育・食育課と協議を行い、以下の成果が得られました。

①新型コロナウイルスの発生による生活様式の変化が学童に与える影響

47自治体の約10万人の学童の学校健診データを用いて、COVID-19流行前後における健康変化について検討しました。その結果、中学校3年生を対象とした肥満傾向とやせ傾向に関する分析では、2019年度と比較して2020年度においては男女ともに肥満割合が統計的に有意に増加していることが明らかになりました。また、やせ傾向については、男子において若干の増加傾向が確認され、統計的に有意な結果となりました。

②データを利活用するうえでの自治体における個人情報保護条例に関する課題の整理

2014年から2021年8月までに実施した、自治体が保有する学校健康診断情報の可視化事業において、各自治体の個人情報保護条例への対応について調査しました。その結果、財政力指数の低い自治体、または、人口規模の小さい自治体ほど、個人情報の取扱いに関する課題の整理がなされていないことが明らかになりました。また、過年度に実施したアンケート調査の結果と併せて検討した結果、保護者と自治体の担当者において、データの利活用に対する理解に差異がある可能性が示唆されました。得られた成果については、令和4年度において学会誌への投稿や一般市民との対話を予定しています。

🍌 研究業績の評価に基づく資源配分効果の動態的特性分析のための基礎研究

研究課題名

研究業績の評価に基づく資源配分効果の動態的特性分析のための基礎研究

プロジェクト期間

2021（R3）年6月～2022（R4）年3月

プロジェクトメンバー

- ・大山 達雄（政策研究大学院大学 名誉教授）
- ・標葉 隆馬（大阪大学社会技術共創研究センター 准教授）*共同提案者

行政担当部署

文部科学省 大臣官房政策課 政策推進室

取り組む課題

研究を通じた知識生産活動においては、その領域・分野によって着想から成果創出までの標準的な期間（ライフサイクル）は異なると考えられます。評価システムが研究開発成果の最大化に寄与するためには、評価サイクルと知識生産のライフサイクルの合致が必要ですが、学問領域分野別の知識生産のライフサイクルは明らかにはなっていません。そこで、我が国の研究開発のエコシステムを進化させるため、学問領域分野別の知識生産のライフサイクルを定性・定量の双方のデータ分析から明らかにすることに取り組めます。

プロジェクト概要

現状の研究業績評価の課題を抽出し、新たな業績評価法を提案し、妥当性を検証します。その上で研究業績評価と資源配分の動的プロセスに関する政策設計と運用のための数理モデルの概念設計・パイロットモデルを構築するために、以下の6点を行います。

- ①各種データベース（KAKEN、SCOPUS、Web of Science、SPIAS、プレプリントサーバー等）を用いて現状の研究業績評価に関する課題を抽出する。
- ②上記課題を基に学問分野領域別の研究業績評価指標を定義、構築し、その妥当性を検証する。
- ③新興・融合分野として、ライフサイエンス、ナノテクノロジーといった特定分野における研究業績評価に焦点を当て、その分野における業績評価方法の構築を目指す。
- ④特にタイムラグの影響に注目しながら、学問分野領域別の研究業績評価指標に基づく業績評価と資源配分に関する相互関係、フィードバックサイクルの動的特性を明らかにした上で、わが国にとってより望ましい評価・資源配分サイクルがどのようなものかを描くための数理モデルの概念設計を提示する。
- ⑤上記数理モデルの概念設計に当たっては、いずれかの特定学問分野領域に焦点を当てたマイクロなパイロットモデル分析と学問全体を俯瞰したマクロモデルの両面から取り組む。
- ⑥関連する政策設計と運用に対して、研究業績評価と資源配分の動的プロセスの数理モデル分析から得られた新たな知見と情報を反映させ、これら動的プロセスを踏まえた政策の策定、評価に貢献する。

2021年度の主たる研究成果

本プロジェクトでは、人文・社会科学分野における研究評価をめぐる課題の整理を中心に行ってきました。特に日本が抱える構造的課題と現代的課題の検討、ならびに日本においては資料の少ないイタリアの研究評価をめぐる議論の現状整理を中心に研究を行いました。さらに継続課題として、哲学分野の研究活動に注目し、国内の科研費採択プロジェクトの推移と国内主要学術誌掲載論文タイトルのデータの分析を進めました。インプットとアウトプットのデータにおけるプロジェクト傾向のタイムラグなどを見ていくことで、人文学分野の研究動向のこれまでの経緯がより明確に可視化されてくることが期待されています。

本プロジェクトの大阪大学主体のものとして、研究会4回、行政官との打合せ2回、学会発表1回（本プロジェクト全体での共同発表は他にも別途）、そしてELSIノートとしての資料公表1件となっています。今回の成果において一つ強調すべきは、人文・社会科学分野の研究評価の議論に哲学を背景とする若手研究者を巻き込んで、その経験を積む機会を獲得したことです。今後、人文・社会科学分野の研究当事者らが研究評価をめぐる議論に積極的に参加することが求められることが予想されますが、今回の機会創出はそのような要請に応えるものであったと言えます。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

本拠点 STiPS は、関西ネットワークの拡大を目的とした研究会やイベントを開催しています。2021年度は、科学技術コミュニケーション分野の第一線で活躍する専門家を招いての研究会（シリーズの趣旨は後述）、NHK の協力を得て放送と社会について考える研究会のほか、大阪大学社会技術共創研究センター（ELSI センター）などとともに、新規科学技術の ELSI をテーマにした市民参加型ワークショップを2回実施し、新しいネットワークの開拓にも努めました。

🍷 STiPS Handai 研究会（セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方」ほか）

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

本シリーズは、将来的に専門知と社会をつなぐ仕事に関心のある学生を念頭に置き、実務経験者によるゲストレクチャーを含む、参加者同士のディスカッションを中心に進行します。具体的には、科学技術コミュニケーションとよばれる分野の第一線で活躍するゲスト講師(実践的研究者、デザイナー、ファシリテーター、ジャーナリスト、政策担当者、弁護士、弁理士、シンクタンク研究者等)を招き、それぞれがどのようにキャリアを形成してきたのか、特に専門知と社会をつなぐためにどのような仕事をしているのか、についてお話を伺いながら、参加者も交えて議論をしました。

第 80 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）#1
- ゲスト：詫摩 雅子（日本科学未来館 科学コミュニケーション専門主任）
- 日時：2021 年 6 月 22 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2021 年 6 月 22 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」がスタートしました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 27 人が参加しました。



第 1 回のゲストは日本科学未来館（以下、未来館）の詫摩雅子さん。この日は、詫摩さんが未来館で関わってこられた「ゲノム編集技術のヒト受精卵への応用」をテーマにした実践の経験をご紹介いただきました。「正解のない問題」を科学コミュニケーションの実践でどのように扱うのか、様々な人を議論にどのように巻き込むのか、そして、実践活動の落とし所をどのように設定するのかといったことを中心にお話しいただきました。

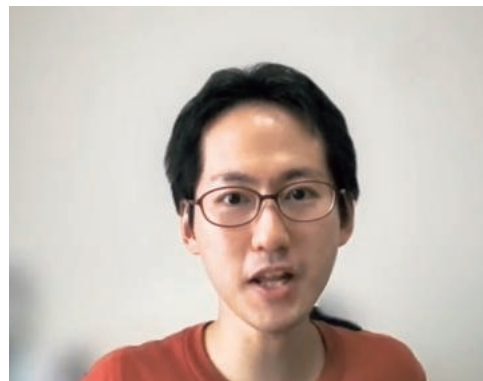
詫摩さんの実践経験にもとづいたお話から、「正解のない問題」の議論に人々を巻き込んでいく大きな意義を感じることができました。また、詫摩さん自身が「つなぐ」人材に必要な素質として、「おもしろい」と思える能力を挙げていた通り、ご自身の経験を生き生きとおもしろそうにお話される詫摩さんの姿が非常に印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210622/>) に開催レポートを掲載しています。

第 81 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）#2
- ゲスト：藤本 翔一（株式会社メルカリ R4D Operations Research Administrator）
- 日時：2021 年 6 月 29 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」第 2 回を、2021 年 6 月 29 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 33 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 2 回のゲストは、メルカリの研究開発組織 R4D にてリサーチアドミニストレーターとして活躍されている藤本翔一さんでした。藤本さんによる話題提供のタイトルは「科学技術ガバナンス実践奇譚～政府で企業でつなげつながりこんがらがったりほぐしたりする仕事の話～」。藤本さんがこれまでに政府系機関や民間企業にて実践してきた「つなぐ人」としての働き方について、当時の経験や現在の活動内容をご紹介いただきました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210629/>) に開催レポートを掲載しています。

第 82 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）#3
- ゲスト：三成 寿作（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）上廣倫理研究部門 特定准教授）
- 日時：2021 年 7 月 6 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」第 3 回を、2021 年 7 月 6 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 29 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 3 回のゲストは、京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）上廣倫理研究部門に所属されている三成寿作さんでした。三成さんは北九州市立大学大学院国際環境工学研究科を修了され、大阪大学大学院医学系研究科などを経て、現在は CiRA でお仕事をされているのですが、その間に日本医療研究開発機構（AMED）への出向も経験されています。現在は iPS 細胞研究やゲノム研究といった先端生命科学領域の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）についての研究に従事されています。

三成さんが博士号取得後に「生命科学技術の発展と社会との間をどう調整するか、それを政策としてどう動かし、その際にどんな価値判断をしていかないといけないか」に興味を持っていたことや、ここまで取り組んでこられたゲノム研究の ELSI、ご自身が携わったゲノム研究を規制するための指針の改正について紹介いただきました。

最後に、AMED での経験についてもお話もいただきました。在籍されていた 2015 年当時、各省や協議会との調整業務を担当されていました。元々、プログラムオフィサー（PO）という仕事に関心があったこと、また、政策ができていく現場を学びたかったということもあり、AMED へ出向を決めたそうです。日本の研究の発展や不意に生じるミスコミュニケーションの回避・解消に努めたいとおっしゃっていました。成果が必ずしも形に残らずとも、成果は「自身の経験や表現の中に溶け込んでいく」というお話が印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210706/>) に開催レポートを掲載しています。

第 83 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）#4
- ゲスト：濱田 志穂（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）企画運営室 主査）
- 日時：2021 年 7 月 13 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン会議システム
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」第 4 回を、2021 年 7 月 13 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 28 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 4 回のゲストは JST 社会技術研究開発センター（RISTEX）の濱田志穂さんです。濱田さんには「モノ言う黒衣として「つなぐ」ファンディングエージェンシーの仕事」のタイトルにてお話を伺いました。

濱田さんはファンディングプログラムの企画設計や推進を担当され、国と研究機関や専門家、企業など、様々な人そして社会をつなぐ仕事に従事されています。公的機関としてのファンディングエージェンシーの仕事について、そして現在、担当されているプログラムを例に、現場やステークホルダーと連携していく中でさまざまな分野の専門家がかかわっていることなどをお話しいただきました。また、プログラムの成果を届ける先も企業や投資家、研究者や市民、そして国の内外など多様であり、「きちんとつなぐ」ことがプログラムを運営する責任とおっしゃっていました。

多くの分野の専門家が集まると、同じ言葉を使っていても視点や考え方が異なる場合があります。多様な分野を「つなぐ」側には各専門分野の言葉の理解に始まり、分野毎の差異の理解も不可欠だそうです。それだけではなく、議論や意思決定の過程を可視化して、残していくことが大切だそうです。これは多くの人が参画する中で意思決定プロセスとしても、税金を原資としている JST が説明責任を果たす上でも大切というお話でした。

他にも具体的な「つなぐ」ケースや「つなぐ」場面での困難など、様々な質問に対し、ご経験に基づいた丁寧な返答をいただき、つなぐ側に必要な多くのヒントを得ることができました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210713/>) に開催レポートを掲載しています。

第 84 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）#5
- ゲスト：朱 喜哲（株式会社電通 ソリューション・デザイン局 主任研究員／大阪大学 ELSI センター 招へい教員）
- 日時：2021 年 7 月 20 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度夏）」第 5 回を、2021 年 7 月 20 日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 28 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



今回のゲストは、株式会社電通ソリューション・デザイン局の朱喜哲さんでした。朱さんは株式会社電通の主任研究員としてデータビジネスに携わる傍ら、大阪大学大学院文学研究科や社会技術共創研究センター（ELSI センター）の招へい教員を務めています。哲学の研究者として「コミュニケーションに関わる哲学」を専門にしつつ、同時にビジネスの場においてはデータビジネスの専門家でもあります。

朱さんからは、ビジネスとアカデミアの二足のワラジをはくようになった経緯について、ビジネスパーソンとして取り組まれているお仕事の内容について、そして倫理的観点から「つなぐ」人材の重要性について、ご紹介いただきました。

朱さんのお話の中で印象的だったのは、企業で働いた経験が、研究を進める上でも活きた、というエピソードでした。修士論文に取り組んでいた頃は 1 人で文献研究を進める「個人で頑張る研究」しか知らなかったけれど、ビジネスの現場を経験した後は、「人と協力する共同研究」というスタイルへと視野が広がったと仰っていました。朱さんは「お試し」として就職したと表現されていましたが、企業で働いた経験を通じて研究の幅や視野を広げられたことに驚きました。企業への就職かアカデミアか、という二者択一の選択ではなく、どちらも経験し両立する、という朱さんのキャリアは非常に参考になりました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210720/>) に開催レポートを掲載しています。

第 88 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：放送のプロフェッショナルと社会を考える（2021 年度）
- ゲスト：錦織 直人（NHK 大阪拠点放送局 チーフ・プロデューサー）、横里 征二郎（NHK 大阪拠点放送局 ディレクター）、野田 雄介（NHK 大阪拠点放送局 エグゼクティブ・ディレクター）
- 日時：2021 年 11 月 4 日（木）13:00～17:50
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2021 年 11 月 4 日（木）に、「放送のプロフェッショナルと社会を考える（2021 年度）」を開催しました（集中講義「メディアリテラシー」の一環として開催）。Zoom で開催したオンラインセミナーに 27 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

1 人目のゲスト、福祉班チーフ・プロデューサーの錦織直人さん（写真上）からは、「10 年目を迎えた「バリバラ」の歴史を振り返る」というテーマでお話いただきました。番組制作にあたっては、乗り越えるべき障害は体や病気ではなく社会にあるという視点から、社会を変えていく起点にメディアがなりうるという点を意識しているというお話がありました。

2 人目のゲスト、報道番組班ディレクターの横里征二郎さん（写真中央）からは、「NHK スペシャル「忘れられた戦後補償」、番組にこめた思い」というテーマでお話いただきました。番組制作の背景にあるご自身の気づきをもとに、番組制作の具体的なプロセスや苦勞した点、大切にしたことなどをお話いただきました。

3 人目のゲスト、ドラマ班エグゼクティブ・ディレクターの野田雄介さん（写真下）からは、「ドラマで社会問題を表現する：「六畳間のピアノマン」を事例に」というテーマでお話いただきました。ドラマ制作では、今、このドラマを放送する意義は？、ドラマを通して何を伝えたいのか？、を常に意識して演出をしてきたことなどをお話いただきました。



STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20211104/>) に開催レポートを掲載しています。

第 89 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）#1
- ゲスト：森田 由子（日本科学未来館 事業部 経営戦略室 科学コミュニケーション専門主任）
- 日時：2021 年 12 月 14 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2021 年 12 月 14 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」がスタートしました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 15 人が参加しました。



今回のゲストは日本科学未来館 科学コミュニケーション専門主任の森田由子さんでした。森田さんには、まず、博士号を取得してから大学や企業での研究職等を経て日本科学未来館（以下、未来館）の科学コミュニケーション専門主任になられるまでの経歴について、次いで未来館での仕事がどのようなものかについて、お話しをしていただきました。その後、参加者からの質問に答えつつ、ここまでのお話の内容を掘り下げるような説明を加えてくださいました。

未来館は、「科学技術を文化として捉え、私たちの社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、すべての人々にひらかれた場」を設立の理念としています。未来館は、「科学を伝える」（科学技術に関する展示をする・情報発信をする）だけでなく、「人材を育てる」（科学に関して一般の人達にわかりやすく伝え、また先端科学技術と社会の在り方について一般の人達と専門家とをつなぐことのできる科学コミュニケーターの育成をする）ため、そして、「つながりをつくる」（研究者や技術者、来館者、学校、国内外の科学館、産業界など社会のさまざまな人達とのネットワークを形成する）ための、「プラットフォーム」だそうです。

未来館での展示の企画から設計、制作までのお話や、大学院生や研究者、小中学校の教員向けの科学コミュニケーション研修を実施していること、科学コミュニケーションに関する調査なども行っていることをお話しいただきました。展示制作においても研修や調査においても、未来館内部だけでなく外部の専門家等様々な人の協力が不可欠であり、「自分で全部を抱え込むのではなく、より良いアウトプットを出すために、誰かと誰かをつなげることに力点を置いていきたい」と話されていました。今回のセミナーを通じて、博士号取得後の研究職以外のキャリアパスについて視野を広げて考えるきっかけになりました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20211214/>) に開催レポートを掲載しています。

第90回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021年度冬）#2
- ゲスト：嶋田 義皓（国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター（CRDS） システム・情報科学技術ユニット フェロー）
- 日時：2021年12月21日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021年度冬）」第2回を、2021年12月21日（火）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に15人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第2回のゲストは国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター（CRDS）の嶋田義皓さんでした。嶋田さんは、東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻博士課程を修了後、日本科学未来館で科学コミュニケーターとして展示解説や実演、展示の企画に携わりました。例えば、ドラえもんをテーマにした展示（「ドラえもんの科学みらい展」）の企画を担当されたそうです。その後、JST 戦略研究推進部でIT分野の研究プロジェクトの立案・管理・広報などの業務に従事され、現在は、JST 研究開発戦略センターでお仕事をされています。ノーベル物理学賞発表の時期には、NHKのニュース内で解説を経験したこともあるそうです。また、2019年には、政策研究大学院大学で2つ目の博士号（公共政策分析の分野で）を取得されています。

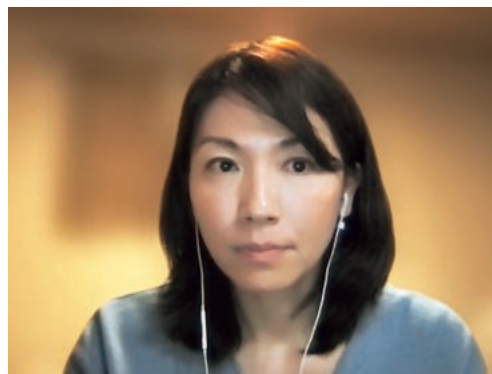
嶋田さんからは、科学と社会を「つなぐ」ことについて、またそのヒントについて、それぞれの項目ごとにお話いただきました。その前提として、まず、科学技術と「つなぐ人」に対する嶋田さんの考え方についてお話いただきました。「科学と社会が独立して存在し、その間をつなぐ」というものではなく、「社会という大きなくくりがあり、その中に科学や法律など様々な要素が包括されているようなモデル」と考えている。また、科学コミュニケーターという“仕事”はなく、科学技術コミュニケーションという“学理”もない。科学技術コミュニケーションというのは能力やスキルであるという考えを提示されていました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20211221/>) に開催レポートを掲載しています。

第 91 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）#3
- ゲスト：桑子 朋子（一般社団法人 SiCP 理事／中外製薬株式会社 デジタル戦略推進部）
- 日時：2022 年 1 月 19 日（水）15:00～16:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」第 3 回を、2022 年 1 月 19 日（水）に実施しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 15 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



第 3 回のゲストは、桑子朋子さん。このシリーズの他の回同様に、今回も、前半はゲストによる話題提供です。話題提供のタイトルは「企業での“つなぐ”仕事と Science Communication & Production」でした。桑子さんは、中外製薬株式会社デジタル戦略推進部でお仕事をしつつ、一般社団法人 SiCP の理事も務めていらっしゃいます。これまで、JT 生命誌研究館、日本科学未来館、国立がん研究センター、電通テックと様々な機関でお仕事をされた経験があるそうです。始めからこのようなキャリアを計画していたわけではなく、その時々々のライフイベントや、自分の関心にしたがってキャリアチェンジしてきた、とのことでした。それぞれの機関でどのようなことに取り組み、何を感じたのかということを順にご紹介いただきました。

お話の各所に、桑子さんが考える「つなぐ人とは？」が登場していました。「これから求められるつなぐ人というのは、ただ情報を横流しにする人ではなく、課題解決や価値創造に貢献する人である」、「今後、つなぐ人は、どんなコミュニティ、組織にも求められる」、「つなぐ人の特徴として、自助、互助、共助のバランスがとれているということが挙げられるのではないかな」。様々な場所で、様々なお仕事を経験されてきた桑子さんがおっしゃるこの言葉は、とても説得力があるように感じます。つなぐ人のマインドセットや哲学のようなものを考えるきっかけになりました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20220111/>) に開催レポートを掲載しています。

第 92 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）#4
- ゲスト：代島 慶一（静岡科学館る・く・る 企画・展示担当長／主査）
- 日時：2022 年 1 月 18 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2022 年 1 月 18 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」第 4 回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今シーズンは、Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催しています。今回は、大阪大学の学生を中心に 20 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



今回のゲストは、静岡科学館る・く・るの代島慶一さんです。前半は、代島さんから「地域における科学コミュニケーション活動とその拠点としての科学館」というタイトルの話題提供をしていただき、後半に質疑応答の時間をもちました。

代島さんは高校生の頃から宇宙に関心を持ちつつ、一方で、生き物にも興味があったため、琉球大学理学部に進学し、大学では沖縄の鳥類生態・島嶼生態の研究をされていました。この研究を通じて、貴重な生き物を保護するためには、地元の人に関心を持ってもらうことが必要だと感じるようになったそうです。人と自然をつなぐ、人と研究をつなぐ、ということに関わりたいと考えるようになった代島さんは、筑波大学の修士課程に進学し、自然保護地域の研究に取り組みました。大学院を卒業後、一旦は IT 企業に就職したものの、やっぱり科学や自然を伝える仕事がしたいという気持ちがあったそうです。たまたま日本科学未来館のウェブサイトで見つけ、募集の案内を見つけ、転職を決めたとのことでした。日本科学未来館の科学コミュニケーターは 5 年の任期制なので、任期の後は、静岡科学館る・く・るでお仕事をされています。

代島さんは「企画・展示担当長」ということで、その活動内容について詳しく教えていただきました。静岡科学館の中で企画展の実施や、サイエンスショーの企画・実施、研究者とのトークイベントの企画、自然観察会の実施など、幅広い業務をこなしているそうです。科学を伝えるための「鍵」についても教えていただきました。代島さんのお話や質問への受け答えからは、科学を伝えることへの熱意が感じられました。多くの人が身近なところに科学を感じることをできるように、「科学を文化に」するために、地域の科学館が貢献できることを探して実践されている代島さんに大いに感銘を受けました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20220118/>) に開催レポートを掲載しています。

第 93 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）#5
- ゲスト：堀川 晃菜（サイエンスライター／科学コミュニケーター）
- 日時：2022 年 1 月 25 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2022 年 1 月 25 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2021 年度冬）」最終回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。今シーズンは、Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催してきました。今回は、大阪大学の学生を中心に 22 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



この日は、フリーランスのサイエンスライターとしてお仕事をされている堀川晃菜さんより、「サイエンスライターとしての“つなぐ”仕事」というテーマでお話を伺いました。堀川さんは東京工業大学大学院生命理工学研究科の修士課程を修了し、農薬・種苗メーカーで総合職として勤務された後、日本科学未来館に転職し、科学コミュニケーターとして様々な企画を実施。その後、Web メディアの編集・記者を経験され、現在はフリーランスのサイエンスライターとして科学記事の執筆・編集や監修などをされています。

堀川さんは農薬・種苗メーカーへの内定が決まった時、周囲から「農薬の仕事なんて危くない？大丈夫なの？」と言われたそうです。それまでは科学技術に対して「人の役に立つもの」という見方をしていた堀川さんだったのですが、身近な人や世間の科学技術へのイメージはまた違うのかもしれないと、この時をきっかけに“モヤモヤ”とした気持ちが生まれました。営業職を担当するうちにさらにそのモヤモヤが高まり、自身のバイオの知識が仕事に直接結びつかないフラストレーションなどもあり、偶然、読んだ雑誌をきっかけに転職。日本科学未来館で科学コミュニケーターとして多様な経験を積みながら、文字を通してより多くの人に科学や技術の情報を発信するサイエンスライターとしても活動を開始していったとのこと。現在は最新の研究内容を紹介するだけではなく、その研究にかける科学者の思いなどを伝えることにやりがいを感じているそうです。

堀川さんは「自分が市民の皆さんとサイエンスを“つなぐ”ことができるのは、表からは見えにくい運営者や企画者、そして研究者の存在があるからだ」とお話しされ、“つなぐ”仕事に関わる方々への敬意と感謝でお話を締めくくられていたのが印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20220125/>) に開催レポートを掲載しています。

❖ その他

市民参加型ワークショップ「それって高すぎる？～フリマアプリ時代の売上の倫理～」

- タイトル：市民参加型ワークショップ「それって高すぎる？～フリマアプリ時代の売上の倫理～」@オンライン
- ゲスト：岸本 充生（大阪大学データビリティフロンティア機構 教授／社会技術共創研究センター センター長）、長門 裕介（大阪大学社会技術共創研究センター 特任助教）
- 日時：2021年7月30日（金）18:30～21:00／31日（土）13:00～15:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2021年7月30日（金）、31日（土）に、市民参加型ワークショップ「それって高すぎる？～フリマアプリ時代の売上の倫理～」をオンラインで開催しました。

対面で開催してきたこれまでの市民参加型ワークショップと同様、グループごとの対話の時間と、出てきた論点を全体で共有する時間を行ったり来たりしながら進めました。これも毎回恒例になっていますが、グループごとの対話の時間には、グループファシリテータが参加者のみなさんをサポートしました。1グループあたりの人数は、参加者3～5人とグループファシリテータ2人。グループファシリテータは、主にSTiPSの授業の受講生や修了生（そして、今回は特別に日本科学未来館からも科学コミュニケーター3人）が担いました。

今回のワークショップに招いたゲストは、新規技術の社会導入について詳しい（そして、経済学者という顔も持っている）岸本充生教授（大阪大学データビリティフロンティア機構／社会技術共創研究センター）と、データビジネスの倫理的な課題について詳しい、長門裕介特任助教（大阪大学社会技術共創研究センター）でした。参加者全体で共有した論点や疑問点については、ゲストに適宜コメントをお願いしました。全体進行は八木絵香教授（大阪大学COデザインセンター／社会技術共創研究センター）が務めました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210730/>) に開催レポートを掲載しています。



7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

🌟 国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2021年度には、以下の活動を行うことができました。

I) InSPIRES プロジェクトのアドバイザーボードへ参加

EUのHORIZON2020で助成されているRRIプロジェクトInSPIRESのアドバイザーボードに引き続き参画しました。

II) PIT-UN (公益技術大学間ネットワーク)への参加

欧米諸国の大学が参加するPublic Interest Technology University Network (PIT-UN: 公益技術大学間ネットワーク)へのSTiPSとしての参加も実現しました。

III) 教育・研究面での新たな連携の試み

豪州国立大学のAustralian National Centre for the Public Awareness of Science (ANU-CPAS)と教育・研究面での連携に向けた議論を行いました。また、米国ジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所・宇宙政策研究所と教育・研究協力として、日米両国の宇宙政策の歴史に関する共同研究を進めました。

🌟 海外調査及び発表等

2021年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

豪州国立大学のAustralian National Centre for the Public Awareness of Scienceとの連携活動の一環として、同センターのDr. Merryn McKinnonが編集する公衆衛生学の教科書『Health Promotion: A Practical Guide to Effective Communication』に、2016-2017年度に副専攻プログラムに在籍した学生の研究プロジェクト(大内詩野「マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識」)をもとにした論考がコラムとして掲載されました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2021年度のSTiPS参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子36ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- 小林傳司. 2022. 「6章 概念と方法 12 トランス・サイエンス論」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 178-179, 2022年2月. 著書
- 平川秀幸. 2022. 「5章 現代的課題 11 遺伝子組換え作物」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 128-129, 2022年2月. 著書
- 平川秀幸. 2022. 「6章 概念と方法 17 レギュラトリーサイエンス」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 188-189, 2022年2月. 著書
- 平川秀幸. 2022. 「6章 概念と方法 21 科学技術と公共空間」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 196-197, 2022年2月. 著書
- 平川秀幸. 2022. 「6章 概念と方法 32 ラトゥールの方法：科学の人類学」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 218-219, 2022年2月. 著書
- 八木絵香. 2021. 「気候変動問題をめぐる変化への抵抗—ミニ・パブリックスを通じた検討」, 『心理学ワールド』, 93: 27-28, 2021年4月. 学術論文
- 八木絵香. 2021. 「事故の記憶を紡ぎ、安全な社会を作るために—JR福知山線事故を事例として—」, 『土木学会誌』, 106 (7) : 32-35, 2021年7月. 学術論文
- 八木絵香. 2022. 「6章 概念と方法 20 科学技術への市民参加」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 194-195, 2022年2月. 著書
- 渡邊浩崇. 2021. 「ジョンソン政権の宇宙政策: アポロ計画と国際協調」, 『阪大法学』, 71 (3、4) : 297-338, 2021年11月. 学術論文
- 渡邊浩崇. 2022. 「第1部 日本の宇宙政策・計画の歴史 第1章 日本の宇宙政策の歴史と現状—自主路線と国際協力—」, 渡邊浩崇 編. 『宇宙の研究開発利用の歴史—日本はいかに取り組んできたか』, 大阪大学出版会, 11-25, 2022年3月. 著書

- 渡邊浩崇. 2022. 「第2部 米露欧の宇宙政策・計画の歴史 第6章 アメリカ宇宙政策の歴史ーアポロ計画を中心としてー」, 渡邊浩崇 編. 『宇宙の研究開発利用の歴史ー日本はいかに取り組んできたか』, 大阪大学出版会, 183-195, 2022年3月. 著書
- 工藤充, 大橋理枝, 白根純人, 千葉和義, 奈良由美子. 2021. 「科学リテラシーの振興活動における「協働」の必要性についての検討」, 『Co*Design』, 10: 15-29, 2021年7月. 学術論文
- Ouchi, S. and Kudo, M. 2021. "Case Study 7.1. What do Japanese public health experts think about health or medical information provided by the mass media?" in McKinnon, M. (ed.) Health Promotion: A Practical Guide to Effective Communication. Cambridge: Cambridge University Press. 151-153, 2021年7月. 著書
- 工藤充, 水町衣里, 渡邊浩崇, 八木絵香, 平川秀幸. 2022. 「人文学・社会科学的手法を用いた、科学技術と社会に関する研究実践を通じた高度汎用力涵養の試み: 『研究プロジェクト』のこれまでとこれから」, 『Co*Design』, 11: 77-100, 2022年2月. 学術論文
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 国産ワクチンない日本 「国家」を合理的に使い倒せ」, 『朝日新聞』, 4月23日朝刊, 2021年4月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 五輪「真の責任者」は 強烈な「無責任」に向き合う」, 『朝日新聞』, 5月28日朝刊, 2021年5月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 複製可能なデジタルアート 「一点物」にする技術、注目」, 『朝日新聞』, 6月25日朝刊, 2021年6月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 「モダンの作法」は通用しない 「無力感の夏」の先へ」, 『朝日新聞』, 8月27日朝刊, 2021年8月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) ワクチン副反応に思う リスクの議論、やはり納得感」, 『朝日新聞』, 10月1日朝刊, 2021年10月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 田所博士と世良教授 「悪役」わからぬ現実ならば」, 『朝日新聞』, 10月29日朝刊, 2021年10月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 『リスクコミュニケーション 標準マニュアル (著/文: レジーナ・E・ラングレン、アンドレア・H・マクマキン)』, 福村出版, 2021年10月. 監修・翻訳
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) サブサハラの「少なさ」の謎 世界のコロナ死者 数字から見えたもの」, 『朝日新聞』, 11月26日朝刊, 2021年11月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) M-1から考える「評価」 プロとアマ、最適バランスは」, 『朝日新聞』, 12月24日朝刊, 2021年12月. 寄稿
- 神里達博. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) どうみるオミクロン株 制御の実感、リスク認識左右」, 『朝日新聞』, 1月28日朝刊, 2022年1月. 寄稿
- 神里達博. 2022. 「5章 現代的課題 10 BSE」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 126-127, 2022年2月. 著書
- 神里達博. 2022. 「6章 概念と方法 7 ポスト・ノーマルサイエンス」, 塚原東吾, 綾部広則, 藤垣裕子, 柿原泰, 多久和理実 編. 『よくわかる現代科学技術史・STS』, ミネルヴァ書房, 168-169, 2022年2月. 著書
- 神里達博. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) ウクライナ侵攻と現代 リスク社会、情報戦も拡大」, 『朝日新聞』, 2月25日朝刊, 2022年2月. 寄稿

- 神里達博. 2022. 「(月刊安心新聞 plus) コロナより戦争の恐怖が勝る今 「欧米以外の視点」が必要な理由」, 『朝日新聞』, 3月25日朝刊, 2022年3月. 寄稿
- 岸本充生. 2021. 「新興技術の“レスポンシブルな”社会実装のために」, 『日本機械学会誌』, 124(1229): 24-29, 2021年4月. 学術論文
- 岸本充生. 2021. 「パーソナルデータ取引の倫理的・法的・社会的課題(上)」, 『法律時報』, 93(5): 106-112, 2021年5月. 寄稿
- 岸本充生. 2021. 「科学と政策の間のギャップの可視化と橋渡し: リスク学の知見の貢献」, 『研究 技術 計画』, 36(2): 116-127, 2021年7月. 学術論文
- 岸本充生. 2021. 「倫理的・法的・社会的課題(ELSI)という考え方: なぜ今、企業活動において注目されているのか」, 『ビジネス法務』, 21(7): 35-37, 2021年7月. 寄稿
- 岸本充生. 2021. 「技術と社会の間のギャップを埋めるための倫理的・法的・社会的課題(ELSI)研究」, 『JATAFF ジャーナル』, 9(8): 6-11, 2021年8月. 寄稿
- 岸本充生. 2022. 「規制とイノベーションの新しい関係: 障害物から推進力へ」, 『東京財団政策研究所 ウェブサイト Review』, 2022年1月. 寄稿
- 岸本充生. 2022. 「脱炭素技術を実装するために必要な社会技術の諸課題」, 『脱炭素社会の技術と諸課題 科学技術に関する調査プロジェクト報告書』, 2022年3月.
- 水町衣里, 工藤充, 八木絵香. 2021. 「新規科学技術をめぐる『オンライン対話の場』の記録」, 『科学技術コミュニケーション』, 29: 5-18, 2021年8月. 学術論文
- 川上雅弘, 仲矢史雄, 片桐昌直, 水町衣里, 任田康夫. 2021. 「理科指導における社会との関連内容を扱う際の中学・高校理科教員の意識」, 『科学教育研究』, 45(4): 421-429, 2021年12月. 学術論文

学会発表等

- 渡邊浩崇. 2021. 「宇宙の研究開発利用の歴史: 日本と米国」, 第65回宇宙科学技術連合講演会, セッション OS12「宇宙の歴史6: 宇宙政策史、宇宙法制史、宇宙科学技術史、宇宙産業史」, (オンライン), 2021年11月12日. 企画, 司会, 発表
- Watanabe, H. 2022. “The Evolution of Japan’s Space Policy and Organizations: Domestic, Diplomatic and Security Challenges,” paper presented at the 33rd International Symposium on Space Technology and Science (ISTS) (オンライン), 2022年3月1日. 企画, 司会, 発表
- 工藤充. 2021. 「Science and Technology Studies and Practice-based Research of Public Engagement in Japan」, 科学技術社会論学会設立20周年記念『JSSTS 2021 and Beyond—「科学技術と社会」を再考する』, 2021年9月23日. 口頭発表
- 坂田成実, 神里達博. 2021. 「人工知能政策の形成過程分析—科学技術と期待の関係に着目して」, 2021年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会(オンライン), 2021年12月4日. 口頭発表
- 金子雄伍, 神里達博. 2021. 「日本の天然記念物言説における科学的知識の「機能」の変遷——日本の天然記念物保存運動に見る“科学と社会の関わり”の変容——」, 2021年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会(オンライン), 2021年12月4日. 口頭発表

社会活動(講演会・展示会などアウトリーチ活動等)

- 小林傳司. 2021. インタビュー掲載, 「シリーズ論評 31 核のごみどこへ 「廃棄物対策庁」創設を」, 『北海道新聞』, 2021年8月1日朝刊, 2021年8月1日.

- 小林傳司. 2021. コメント掲載, 「迷走したコロナの科学」, 『日本経済新聞』, 2021年11月20日朝刊, 2021年11月20日.
- 小林傳司. 2021. パネリスト, 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター×ICF2021 特別セッション 「科学と社会の対話の未来ー情動優位時代に『合意形成』は可能なのか」(オンライン), 2021年11月22日.
- 小林傳司. 2021. 講演, 「ELSI および責任ある研究・イノベーション (RRI) について」, 学術フォーラム「ELSIを踏まえた自動運転の社会実装ー自動運転の社会実装と次世代モビリティによる社会デザインー」(オンライン), 2021年12月13日.
- 小林傳司. 2022. インタビュー掲載, 「社会技術の20年を振り返るー多様な知の組み合わせによる社会課題解決の研究開発ー」, 『RISTEXのこれまで、いま、これからー社会技術-RISTEXの20年ー』, 2022年3月.
- 平川秀幸. 2021. コメント掲載, 「迫るパラリンピック、不安拭えぬまま」, 『中日新聞』, 2021年8月12日朝刊, 2021年8月12日.
- 平川秀幸. 2021. コメント掲載, 「科学的助言者の独立守って コロナ専門家の五輪提言」, 『毎日新聞』, 2021年9月9日朝刊, 2021年9月9日.
- 平川秀幸. 2021. コメント掲載, 「特報 新型コロナ ワクチン促進 特典頼み? 車・旅行券・飲食クーポン 「若者振り向いて」 2回接種 64歳以下36%止まり」, 『中日新聞』, 2021年9月15日朝刊, 2021年9月15日.
- 八木絵香. 2021. 講師, 「「オンライン市民参加型イベント」運営の技法」, 大阪大学ファカルティ・ディベロップメントプログラム(オンライン), 2021年5月25日.
- 八木絵香. 2021. 話題提供, 「科学技術への『市民参加』について考えてみよう」, 第6回SSI学生をつどい「阪大SDGs学のスズメ。」(オンライン), 2021年5月27日.
- 八木絵香. 2021. 指定討論者, ELSIセンター研究会「シリーズ ELSI人材像を考える #1 ELSI人材とは何かー科学技術と社会的課題を扱う人材像について」(オンライン), 2021年6月7日.
- 八木絵香. 2021. パネリスト, ELSIセンター研究会「未来の社会像を創造するー埋め込み型サイボーグ技術のELSIー」(オンライン), 2021年6月14日.
- 八木絵香. 2021. 全体進行, 市民参加型ワークショップ「それって高すぎる?ーフリマアプリ時代の売買の倫理ー」(オンライン), 2021年7月30-31日.
- 八木絵香, 水町衣里. 2021. 企画、制作, 対話ツール「ちょっと未来の食生活ーゲノム編集食品から考えてみるー」, 2021年7月(公開).
- 工藤郁子, 八木絵香, 水町衣里. 2021. 企画、制作, 対話ツール「ちょっと未来のヒトの移動ー続 感染症対策に使われる情報技術ー」, 2021年7月(公開).
- 八木絵香, 水町衣里. 2021. 企画、制作, 対話ツール「それって高すぎる?ーフリマアプリ時代の売買の倫理ー」, 2021年8月(公開).
- 八木絵香. 2021. パネリスト, 「医療・科学技術と民衆の知恵」, 第6回学術知共創プロジェクトワークショップ「分断社会の超克ー専門知をめぐる格差ー」(オンライン), 2021年9月13日.
- 八木絵香. 2021. 講師, 「科学技術とコミュニケーション」, 大阪大学SEEDSプログラム「体感科学技術・体感国際交流の講義2021」(オンライン), 2021年9月18日.
- 八木絵香. 2021. 進行, 「『科学者は社会に向けてどのような発信をすればよいのか』を考える」, 大阪大学SEEDSプログラム「分野横断型ワークショップ」(オンライン), 2021年10月2日.

- 八木絵香. 2021. 講師, 「リスクある内容をどう相手と相互理解するか」, 静岡市立静岡科学館「静岡科学館科学コミュニケーター育成講座」(静岡科学館る・く・る), 2021年10月24日.
- 八木絵香, 水町衣里. 2021. 講師, 「「オンライン市民参加型イベント」におけるファシリテーションの技法」, 大阪大学ファカルティ・ディベロップメントプログラム(オンライン), 2021年10月26日.
- 八木絵香. 2021. 話題提供, 企画セッション「対話、たりてますか? -コロナとこれから-」, サイエンスアゴラ 2021(オンライン), 2021年11月6日.
- 八木絵香. 2021. 司会(ワークショップ), 中高生向けwebイベント「『再生医療は社会に向けてどのような発信をすればよいのか』考える」(オンライン), 2021年11月28日.
- 渡邊浩崇. 2021. コメント掲載, 「米追う中露、宇宙で接近」, 『読売新聞』, 2021年5月5日朝刊, 2021年5月5日.
- Watanabe, H. 2021. コメント掲載, “China, Russia teaming up in new space race”, *The Japan News (by The Yomiuri Shimbun)*, 2021年5月7日.
- Watanabe, H. 2021. Perspectives “Does Japan still want to continue to be a leading space country?”, 大阪大学ウェブサイト(英語版) *Global Outlook*, Vol. 10, 2021年7月.
- 渡邊浩崇. 2021. 話題提供, 第4回SSI研究者フォーラム「私たちから見える宇宙、宇宙から見える私たち」(オンライン), 2021年12月14日.
- 渡邊浩崇. 2022. コメント掲載, 「打ち上げ再延期 H3 不具合 宇宙開発に影」, 『読売新聞』, 2022年1月29日朝刊, 2022年1月29日.
- 渡邊浩崇. 2022. コメント掲載, 「『ISS 後』 米民間主導 国際宇宙ステーション 30年まで」, 『読売新聞』, 2022年2月3日朝刊, 2022年2月3日.
- Watanabe, H. 2022. コメント掲載, “U.S. looks to private sector to replace aging space station”, *The Japan News (by The Yomiuri Shimbun)*, 2022年2月7日.
- 渡邊浩崇. 2022. コメント掲載, 「宇宙ビジネス 日本を成長軌道へ トップはビジョンを 人材育成も急務」, 『産経新聞』, 3月12日朝刊, 2022年3月12日.
- 渡邊浩崇. 2022. 研究代表, 公共圏における科学技術・教育研究拠点(STiPS)『2018~2021年度宇宙に関するインターネット世論調査報告書』, 2022年3月.
- 工藤充, 水町衣里. 2022. 講演, 「「共創」のカギとしての科学技術コミュニケーション」, 文部科学省「SciREX ブラウンバッグセミナー」(オンライン), 2022年2月21日.
- 工藤充. 2022. 講演, 「科学リテラシーの振興活動における「協働」の必要性についての検討」, 科学技術の智ラボラトリ アニュアルワークショップ2022「コロナの向こうの科学リテラシー」(オンライン), 2022年3月21日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「学習データとしてのインターネットコンテンツ利用の研究倫理~顔認識技術を巡る2019~2021年」, 応用哲学会第十三回年次研究大会(オンライン), 2021年5月23日.
- 岸本充生. 2021. 講演など, 「ELSIという考え方 ~なぜ今、企業で必要か」, オンラインセミナー「企業におけるELSIと責任あるイノベーション」(オンライン), 2021年7月29日.
- 岸本充生. 2021. ゲスト, 市民参加型ワークショップ「それって高すぎる?~フリマアプリ時代の売上の倫理~」(オンライン), 2021年7月30-31日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「データサイエンスにおけるELSI(倫理的・法的・社会的課題)」, 応用脳科学アカデミーベーシックコース3「ELSI 第2回」(オンライン), 2021年8月6日.

- 岸本充生. 2021. 講演など, 「新しい医療のリスクとベネフィットの考え方」, 日本再生医療学会「患者・社会と考える再生医療」(オンライン), 2021年8月22日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「規制の政策評価について」, 日本商工会議所 第4回 規制・制度改革専門委員会, 2021年9月13日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「データとAIにおけるELSI」, 第21回 大阪大学-NTT 技術交流会, 2021年10月14日.
- 岸本充生. 2021. 招待講演, 「科学と政策の間を可視化する: ELSI とレギュラトリーサイエンス」, 北海道大学科学技術コミュニケーター養成プログラム (オンライン), 2021年10月30日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「企業活動に ELSI 対応を統合する一人社系産学連携の実践」, 電子情報通信学会技術と社会・倫理研究会 (SITE) シンポジウム「電子情報通信技術における ELSI の実践と教育」(オンライン), 2021年11月12日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「未来ビジネスと ELSI の切り離せない関係」, 関西経済同友会 未来ビジネス委員会, 2021年11月15日.
- 岸本充生. 2021. パネリスト, 「Humane AI」, Group of Nations 「G7-G20 Solutions through Inclusivity virtual summit」(オンライン), 2021年11月17日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「レギュラトリーサイエンスがなぜ必要となったのかをあらためて問う」, Health Innovation Seminar レギュラトリーサイエンス公開講座「いま、あらためてレギュラトリーサイエンスを考える」(オンライン), 2021年11月22日.
- 岸本充生. 2021. 招待講演, 「バイオメトリクス利用の 倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」, SBRA2021「第11回バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム」(オンライン), 2021年11月30日.
- 岸本充生. 2022. 講演, 「リスク学と ELSI」, NHK 職場研修 ELSI セミナー「リスク学と ELSI について、いっしょに考えてみませんか?」(オンライン), 2022年1月25日.
- 岸本充生. 2022. 講演など, 「新興技術の社会実装としてみた EdTech の ELSI 論点」, シンポジウム「学習データ利活用 EdTech (エドテック) の ELSI (倫理的・法的・社会的課題)」(オンライン), 2022年2月1日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 市民参加型ワークショップ「それって高すぎる? ~フリマアプリ時代の売上の倫理~」(オンライン), 2021年7月30-31日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 「『科学者は社会に向けてどのような発信をすればよいのか』を考える」, 大阪大学 SEEDS プログラム「分野横断型ワークショップ」(オンライン), 2021年10月2日.
- 水町衣里. 2021. 指定討論者, ELSI センター研究会「シリーズ ELSI 人材像を考える #2 『ELSI 人材』はどこで・どのように育成されるのかーライフサイエンス領域における人材育成」(オンライン), 2021年10月18日.
- 水町衣里. 2021. 話題提供, 企画セッション「対話、たりてますか? -コロナとこれから-」, サイエンスアゴラ 2021 (オンライン), 2021年11月6日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Takeuchi M, Kawakami K. 2021. Universal palivizumab prophylaxis for children with Down syndrome in Japan: analysis with interrupted time-series. *Hum Vaccin Immunother.* 17(4): 1235-1238. 2021年4月. 論文.
- Gao J, Seki T, Kawakami K. 2021. Comparison of adherence, persistence, and clinical outcome of generic and brand-name statin users: A retrospective cohort study using the Japanese claims database. *J Cardio.* 77(5): 545-551. 2021年5月. 論文.
- Noda M, Yoshida S, Mishina H, Matsubayashi K, Kawakami K. 2021. Association between maternal hypertensive disorders of pregnancy and child neurodevelopment at 3 years of age: a retrospective cohort study. *J Dev Orig Health Dis.* 12(3): 428-435. 2021年6月. 論文.
- Kunitomi Y, Nakashima M, Seki T, Ide K, Kawakami K. 2021. Intergenerational comparison of 5-HT(3)RA in the prevention of chemotherapy-induced nausea and vomiting in gastric cancer patients receiving cisplatin-based chemotherapy: an observational study using a Japanese administrative claims database. *Support Care Cancer.* 29(7): 3951-3959. 2021年7月. 論文.
- Nakashima M, Takeuchi M, Kawakami K. 2021. Effectiveness of barrier agents for preventing postoperative bowel obstruction after laparoscopic surgery: a retrospective cohort study. *Surg Today.* 51(8): 1335-1342. 2021年8月. 論文.
- Yamaguchi S, Matsubayashi K, Mizuno K, Noda M, Takeuchi M, Kawakami K. 2021. First-line antibiotic prescription patterns for acute otitis media in children: A descriptive study using Japanese claims data (2014-2018). *J Infect Chemother.* 27(9): 1300-1305. 2021年9月. 論文.
- Seki T, Tokumasu H, Tanaka H, Katoh H, Kawakami K. 2021. Appropriateness of Percutaneous Coronary Intervention Performed by Japanese Expert Operators in Patients With Chronic Total Occlusion. *Circ J*, Online ahead of print. Epub 2021年10月. 論文.
- Ishii M, Seki T, Kaikita K, Sakamoto K, Nakai M, Sumita Y, Nishimura K, Miyamoto Y, Noguchi T, Yasuda S, Kanaoka K, Terasaki S, Saito Y, Tsutsui H, Komuro I, Ogawa H, Tsujita K, Kawakami K; JROAD Investigators. 2021. Association of short-term exposure to air pollution with myocardial infarction with and without obstructive coronary artery disease. *Eur J Prev Cardiol.* 28(13): 1435-1444. 2021年10月. 論文.
- Yoshida S, Mishina H, Takeuchi M, Kawakami K. 2021. Association of prenatal maternal, prenatal secondhand, and postnatal secondhand smoking exposures with the incidence of asthma/atopic dermatitis in children: An epidemiological study using checkup data of mothers and children in Kobe city. *Nihon Koshu Eisei Zasshi.* 68(10): 659-668. 2021年10月. 論文.
- 吉田 都美, 三品 浩基, 竹内 正人, 川上 浩司. 2021. 「母体喫煙および受動喫煙が小児喘息とアトピー性皮膚炎発症に与える影響の検討：神戸市母子保健情報による疫学研究」, 『日本公衆衛生学会誌』, 68(10): 659-668, 2021年10月. 論文.

- Ji L, Yoshida S, Kawakami K. 2021, Trends and patterns in antibiotic prescribing for adult outpatients with acute upper respiratory tract infection in Japan, 2008-2018. *J Infect Chemother*. 27(11): 1584-1590. 2021 年 11 月. 論文.
- Seki T, Takeuchi M, Kawakami K. 2021, Eating and drinking habits and its association with obesity in Japanese healthy adults: retrospective longitudinal big data analysis using a health check-up database, *Br J Nutr*. 126(10): 1585-1591. 2021 年 11 月. 論文.
- Yoshida S, Tanaka S, Adachi Y, Yoshisue H, Kozawa M, Kawakami K. 2021. Assessment of asthma severity according to treatment steps in Japanese pediatric patients: a descriptive cross-sectional study using an administrative claims database. *J Asthma*. 58(12): 1574-1580. 2021 年 12 月. 論文.
- Masubuchi R, Noda M, Yoshida S, Kawakami K. 2021, Longitudinal study of body mass index and percentage of overweight in Japanese children grouped by maturity. *Endocr J*, Online ahead of print. Epub 2021 年 12 月. 論文.
- Koto R, Sato I, Kuwabara M, Seki T, Kawakami K. 2022. Temporal trends in the prevalence and characteristics of hypouricaemia: a descriptive study of medical check-up and administrative claims data. *Clin Rheumatol*, Online ahead of print. Epub 2022 年 1 月. 論文.
- Kido A, Miyake M, Akagi T, Ikeda HO, Kameda T, Suda K, Hasegawa T, Hiragi S, Yoshida S, Tsujikawa A, Tamura H, Kawakami K. 2022. Association between topical β -blocker use and asthma attacks in glaucoma patients with asthma: a cohort study using a claims database. *Graefes Arch Clin Exp Ophthalmol*. 260(1): 271-280. 2022 年 1 月. 論文.
- Tsuji T, Sato I, Kamimura Y, Ota H, Takeda C, Sobue K, Kawakami K. 2022. Trends and patterns in the practice of pediatric sedation for magnetic resonance imaging in Japan: A longitudinal descriptive study from 2012 to 2019. *Paediatr Anaesth*. Online ahead of print. Epub 2022 年 1 月. 論文.
- Mizuno K, Takeuchi M, Kanazawa Y, Kishimoto Y, Suehiro A, Iwanaga K, Kawakami K, Omori K. 2022. Outcomes of Aspiration Prevention Surgery: A Retrospective Cohort Study Using a Japanese Claims Database. *Dysphagia*. Online ahead of print. Epub 2022 年 2 月. 論文.
- Hashimoto H, Takeuchi M, Kawakami K. 2022. Association between biopsies for anti-neutrophil cytoplasmic antibody-associated vasculitis and prognosis: a retrospective cohort study. *Clin Rheumatol*. 41(2): 541-548. 2022 年 2 月. 論文.
- Nakane S, Tanaka-Mizuno S, Nishiyama C, Kochi K, Yamamoto-Sasaki M, Takeuchi M, Ogawa Y, Doi Y, Arai M, Fujii Y, Matsunaga T, Furukawa TA, Kawakami K. 2022. Trends in Prescribing Antipsychotics for Children and Adolescents in Japan: A Descriptive Epidemiological Study Using a Large-Scale Pharmacy Dataset. *Child Psychiatry Hum Dev*. Online ahead of print. Epub 2022 年 2 月. 論文.
- Takeda C, Yamashita Y, Takeuchi M, Yonekura H, Dong L, Hamada M, Hirotsu A, Ono K, Kawakami K, Fukuda K, Morimoto T, Kimura T, Mizota T. 2022. Incidence, clinical characteristics and long-term prognosis of postoperative symptomatic venous thromboembolism: a retrospective cohort study. *BMJ Open*. 12(2): e055090. 2022 年 2 月. 論文.
- Tsuchida T, Yoshida S, Takeuchi M, Kawakami C, Kawakami K, Ito S; Japan Environment, Children's Study Group. 2022. A prospective cohort study of the association between the Apgar score and

- developmental status at 3years of age: the Japan Environment and Children's Study (JECS). *Eur J Pediatr.* 181(2): 661-669. 2022 年 2 月. 論文.
- Ishida R, Seki T, Kawakami K. 2022. Association between antiulcer agents and *Clostridioides difficile* infection in patients receiving antibiotics: A retrospective cohort study using the diagnosis procedure combination database in Japan. *Anaerobe.* Online ahead of print. Epub 2022 年 2 月. 論文.
- Yoneyama T, Nakashima M, Takeuchi M, Kawakami K. 2022. Comparison of laparoscopic and open inguinal hernia repair in adults: A retrospective cohort study using a medical claims database. *Asian J Endosc Surg.* Online ahead of print. Epub 2022 年 2 月. 論文.
- Tsuchida T, Yoshida S, Takeuchi M, Kawakami K. 2022. Large-scale health insurance study showed that antibiotic use in infancy was associated with an increase in atopic dermatitis. *Acta Paediatr.* 111(3): 607-613. 2022 年 3 月. 論文.
- Takenobu K, Yoshida S, Katanoda K, Kawakami K., Tabuchi T. 2022. Impact of workplace smoke-free policy on secondhand smoke exposure from cigarettes and exposure to secondhand heated tobacco product aerosol during COVID-19 pandemic in Japan: the JACSIS 2020 study. *BMJ Open.* 12(3): e056891. 2022 年 3 月. 論文.
- Takeuchi M, Yoshida S, Kawakami C, Kawakami K., Ito S; Japan Environment and Children's Study Group. 2022. Association of maternal heavy metal exposure during pregnancy with isolated cleft lip and palate in offspring: Japan Environment and Children's Study (JECS) cohort study. *PLoS One.* 17(3): e0265648. 2022 年 3 月. 論文.
- Becker, CB., Taniyama Y, Kondo-Arita M, Sasaki N, Yamada S, Yamamoto K. 2021. Unexplored Costs of Bereavement Grief in Japan: Patterns of Increased Use of Medical, Pharmaceutical, and Financial Services. *OMEGA - Journal of Death and Dying.* 2021; 83 (1): 142-156. 2021 年 5 月. 論文.
- Kashio, Naoki, and Becker, CB., eds. 2021. *Spirituality as a Way: The Wisdom of Japan.* Kyoto University Press, 2021 年 6 月. 論文.
- Becker, CB. 2021 Introduction: Issues in Contemporary Spirituality Studies (pp. 1-9), and How Japanese Spirituality Addresses Grief (pp. 27-41), in Kashio, Naoki, and Carl Becker, eds., *Spirituality as a Way: The Wisdom of Japan.* Kyoto University Press, 2021 年 6 月. 論文.
- Seike, A., Sumigaki, C., Takeuchi, S., Hagihara, J., Takeda, A., Becker, CB., Toba, K., & Sakurai, T. 2021. Efficacy of group-based multi-component psycho-education for caregivers of people with dementia: A randomized controlled study. *Geriatrics & Gerontology International.* 21(7): 561-567. 2021 年 7 月. 論文.
- Tominari, M., Uozumi, R., Becker, CB., & Kinoshita, A. 2021. Reminiscence therapy using virtual reality technology affects cognitive function and morale of elderly with dementia. *Cogent Psychology.* 8(1). 2021 年 9 月. 論文.
- カール・ベッカー. 2021. 「葬儀の貧困は遺族の仕事の生産性や健康を低下させる」, 『月刊住職』, 275:46-51, 2021 年 10 月. 論文.
- 近藤恵, カール・ベッカー. 2021. 「死別悲嘆に対する葬儀の変容する意味と社会的影響」, 『グリーンフ&ビリーブメント研究』, 2:11-18. 2021 年. 論文.

- Hoy, W. G., Becker, CB., & Holloway, M. L. 2021. Memorialization and Death-Related Rituals. In Handbook of Thanatology, 3d ed, H. L. Servaty-Seib & H. S. Chapple, eds. Minneapolis, MN: Association for Death Education and Counseling. 207-234. 2021 年. 論文.
- Becker CB., Taniyama Y, Kondo-Arita M, Sasaki N, Yamada S, Yamamoto K. 2022. Identifying bereaved grievors with greatest medical or social service needs in Japan. Family Medicine and Community Health. 10(1):e001260. 2022 年 3 月. 論文.
- Li, Xinyi, and Ito, J., 2021. An empirical study of land rental development in rural Gansu, China: The role of agricultural cooperatives and transaction costs. Land Use Policy. 109: 105621. 2021 年 10 月. 論文.
- Ito, J., 2022. Program design and heterogeneous treatment effects of payments for environmental services. Ecological Economics. 191: 107235. 2022 年 1 月. 論文.
- Fujii T, Katayama S, Miyazaki K, Nashiki H, Niitsu T, Takei T, Utsunomiya A, Dodek P, Hamric A, Nakayama, T. 2021. Translation and validation of the Japanese version of the measure of moral distress for healthcare professionals. Health Qual Life Outcomes. 19(1):120. 2021 年 4 月. 論文.
- Kojima M, Hasegawa M, Hirata S, Ito H, Kaneko Y, Kishimoto M, Kohno M, Kojima T, Matsushita I, Mori M, Morinobu A, Murashima A, Nishida K, Seto Y, Sobue Y, Sugihara T, Tanaka E, Nakayama, T., Kawahito Y, Harigai. 2021 M. Patients' perspectives of rheumatoid arthritis treatment: a questionnaire survey for the 2020 update of the Japan college of rheumatology clinical practice guidelines. Mod Rheumatol. 19:1913276. 2021 年 5 月. 論文.
- Ito S, Morita T, Uneno Y, Taniyama T, Matsuda Y, Kohara H, Maeda I, Nakayama, T., Mori M; EASED Investigators. 2021. Incidence and associated factors of sudden unexpected death in advanced cancer patients: A multicenter prospective cohort study. Cancer Med. 10(14):4939-4947. 2021 年 7 月. 論文.
- Mizerero SA, Wilunda C, Musumari PM, Ono-Kihara M, Mubungu G, Kihara M, Nakayama, T. 2021. The status of emergency obstetric and newborn care in post-conflict eastern DRC: a facility-level cross-sectional study. Confl Health. 15(1):61. 2021 年 8 月. 論文.
- Ota N, Morita A, Tominari S, Nakayama, T., Nozaki K, Tominaga T, Noda K, Kamiyama H, Tanikawa R. 2021. Differences Between Subarachnoid Hemorrhage Seen in Daily Practice and Aneurysms That Rupture During Follow-Up. Stroke. 52(8):e491-e493. 2021 年 8 月. 論文.
- Matsuoka K, Ishikawa H, Nakayama, T., Honzawa Y, Maemoto A, Hirai F, Ueno F, Sato N, Susuta Y, Hibi T. 2021. Physician-patient communication affects patient satisfaction in treatment decision-making: a structural equation modelling analysis of a web-based survey in patients with ulcerative colitis. J Gastroenterol. 56(9):843-855. 2021 年 9 月. 論文.
- Fukuhara S, Asai K, Fukuhara T, Kakeno A, Yamanaka S, Nakao K, Watanabe T, Takahashi K, Yamazaki T, Umebachi C, Kashiwagi M, Setoh K, Kawaguchi T, Tabara Y, Morita S, Nakayama, T., Matsuda F, Nakao K, Bessho K. 2021. Association Between Tooth Loss and Longitudinal Changes in B-Type Natriuretic Peptide Over 5 Years in Postmenopausal Women: The Nagahama Study. Curr Probl Cardiol. 25:100997. 2021 年 9 月.論文.
- Ohtera S, Kato G, Ueshima H, Mori Y, Nakatani Y, Ozasa N, Nakayama, T., Kuroda T. 2021. A nationwide survey on participation in cardiac rehabilitation among patients with coronary heart disease using health claims data in Japan. Sci Rep. 11(1):20096. 2021 年 10 月. 論文.

- Ikeda-Sakai Y, Kubo K, Wada M, Seki R, Hijikata Y, Yoshioka T, Takahashi Y, Nakayama, T. 2021. Effectiveness and safety of a program for appropriate urinary catheter use in stroke care: A multicenter prospective study. *J Eval Clin Pract.* 2021 年 10 月. 論文.
- Utsumi T, Horimatsu T, Nishikawa Y, Hoshino N, Takahashi Y, Goto R, Kashihara S, Fukuyoshi J, Nakayama, T., Seno H. 2021. Medical costs according to the stages of colorectal cancer: an analysis of health insurance claims in Hachioji, Japan. *J Gastroenterol.* 56(10):903-913. 2021 年 10 月. 論文.
- Ohwada H, Nakayama, T., Ishikawa-Takata K, Iwasaki N, Kanaya Y, Tanaka S. 2021. Total energy expenditure among children with motor, intellectual, visual, and hearing disabilities: a doubly labeled water method. *Eur J Clin Nutr.* 75(11):1607-1617. 2021 年 11 月. 論文.
- Kaneko K, Ito Y, Ebara T, Kato S, Matsuki T, Tamada H, Sato H, Saitoh S, Sugiura-Ogasawara M, Yamazaki S, Ohya Y, Kishi R, Yaegashi N, Hashimoto K, Mori C, Ito S, Yamagata Z, Inadera H, Nakayama, T., Iso H, Shima M, Kurozawa Y, Suganuma N, Kusuhara K, Katoh T, Kamijima M. 2022. Association of Maternal Total Cholesterol With SGA or LGA Birth at Term: the Japan Environment and Children's Study. *J Clin Endocrinol Metab.* 107(1):e118-e129. 2022 年 1 月. 論文.
- Sobue Y, Kojima M, Kojima T, Ito H, Nishida K, Matsushita I, Hirata S, Kaneko Y, Kishimoto M, Kohno M, Murashima A, Morinobu A, Mori M, Nakayama, T., Sugihara T, Seto Y, Tanaka E, Hasegawa M, Kawahito Y, Harigai M. 2022. Patient satisfaction with total joint replacement surgery for rheumatoid arthritis: a questionnaire survey for the 2020 update of the Japan college of rheumatology clinical practice guidelines. *Mod Rheumatol.* 16:1892258. 2022 年 3 月. 論文.
- Hoshino N, Hida K, Fukui Y, Takahashi Y, Nakayama, T., Obama K. 2022. Relationship between diverting stoma and adjuvant chemotherapy in patients with rectal cancer: a nationwide study using the National Database of Health Insurance Claims and Specific Health Checkups of Japan. *Int J Clin Oncol.* 27(3):545-552. 2022 年 3 月. 論文.
- Takahashi N, Matsumoto T, Nakatsuka Y, Murase K, Tabara Y, Takeyama H, Minami T, Hamada S, Kanai O, Tanizawa K, Nakamoto I, Kawaguchi T, Setoh K, Tsutsumi T, Takahashi Y, Handa T, Wakamura T, Komenami N, Morita S, Hirai T, Matsuda F, Nakayama, T., Chin K; Nagahama Study Group. 2022. Differences between subjective and objective sleep duration according to actual sleep duration and sleep-disordered breathing: the Nagahama Study. *J Clin Sleep Med.* 18(3):851-859. 2022 年 3 月. 論文.
- 広井良典. 2021. 『ポスト資本主義：科学・人間・社会の未来』（中国語版），四川人民出版社. 2021 年 4 月. 著書.
- 広井良典. 2021. 「文明危機の今こそグランドデザインを—— AI が示唆する「分散型」と超長期視点にみる「定常化」」，『中央公論』，135（4）：62-69, 2021 年 4 月. 論文.
- 広井良典. 2021. 「AI が示すポストコロナの日本——包括的な「分散型」社会が持続可能性と幸福の鍵に（特集 コロナ禍:自治体・新年度の展望）」，『ガバナンス』，2021 年 4 月号, 23-25. 2021 年 4 月. 論文.
- 広井良典. 2021. 『無と意識の人類史：私たちはどこへ向かうのか』．東洋経済新報社. 2021 年 5 月. 著書.
- 広井良典. 2021. 「「無」と時間」，『ひらく』第 5 号, 232-235. 2021 年 6 月. 論文.

- 広井良典.2021. 「分散型=多極集中」の国土像とは：2050年、日本は持続可能か? (特集 新しい国土)」、『土木学会誌』, 106 (8), 10-13. 2021年8月. 論文.
- 広井良典. 2021. 「第2章 人の資本主義への視点」, 中島隆博編『人の資本主義』, 東京大学出版会. 2021年11月. 著書.
- 広井良典. 2021. 「第9章 脱成長そして地球の有限性の中の資本主義」, 中島隆博編『人の資本主義』, 東京大学出版会. 2021年11月. 著書.
- 広井良典. 2021. 「人口減少社会と分散型システムの展望 (あらたな「均衡ある発展」を考える：東京圏一極集中を超えて)」, 『都市問題』, 112 (11), 4-19. 2021年11月. 論文.
- 広井良典. 2021. 『人口減少社会のデザイン』(韓国語版), Hakgojae Publishers. 2021年. 著書.
- Sakamoto K, Akishiba M, Iwata T, Arafiles JVV, Imanishi M, Futaki, S. 2021. Use of homoarginine to obtain attenuated cationic membrane lytic peptides. *Bioorg Med Chem Lett.* 40:127925. 2021年5月. 論文.
- Iwata T, Hirose H, Sakamoto K, Hirai Y, Arafiles JVV, Akishiba M, Imanishi M, Futaki, S. 2021. Liquid Droplet Formation and Facile Cytosolic Translocation of IgG in the Presence of Attenuated Cationic Amphiphilic Lytic Peptides. *Angew Chem Int Ed Engl.* 60(36):19804-19812. 2021年9月. 論文.
- Yano, M., Hirota, S., Yodo, M., & Matsuda, F. 2021. Nagahama survey on social science. In *Socio-Life Science and the COVID-19 Outbreak.* 145-208. Springer. 2021年12月. 著書.
- Hirota, S., Setoh, K., Yodo, M., & Yano, M. 2021. Socio-Life Scientific Survey on COVID-19. In *Socio-Life Science and the COVID-19 Outbreak.* 209-235. Springer. 2021年12月. 著書.
- 宮野公樹. 2021. 「異分野融合の意味と意義」, 『日本金属学会会報まてりあ (Materia Japan)』, 60 (10) : 615-619, 2021年10月. 寄稿.
- 宮野公樹. 2021. 「学問との再契約：超えるのではなく辿る、二つの文化」, 『アステイオン』, 95: 224-230. 2021年10月. 寄稿.

学会発表など

- Jingwei Gao, Tomotsugu Seki, Akio Ikeda, Koji Kawakami. 2021. (TBD) 37th International Conference on Pharmacoepidemiology and Therapeutic Risk Management Annual Meeting(Virtual), 2021年8月21-25日. 口頭発表.
- Masato Takeuchi and Koji Kawakami. 2021. Baloxavir marboxil vs neuraminidase inhibitors prescription on subsequent medical resource utilization among school-aged children with influenza: analysis of two consecutive seasons in Japan. 37th International Conference on Pharmacoepidemiology and Therapeutic Risk Management Annual Meeting(Virtual), 2021年8月21-25日. 口頭発表.
- Masanobu Ishii, Tomotsugu Seki, Koichi Kaikita, Kenji Sakamoto, Michikazu Nakai, Yoko Sumita, Kunihiro Nishimura, Yoshihiro Miyamoto, Teruo Noguchi, Satoshi Yasuda, Hiroyuki Tsutsui, Issei Komuro, Yoshihiko Saito, Hisao Ogawa, Kenichi Tsujita, Koji Kawakami on the behalf of JROAD Investigator. 2021. ビッグデータ解析からみた大気汚染の短期曝露とMINOCAとの関連. 第69回日本心臓病学会学術集会(米子), 2021年9月17日-19日. 口頭発表.
- 水野佳世子, 大森孝一, 川上浩司. 2021. 「扁桃周囲膿瘍の再発と年齢についての検討」, 第4回日本臨床疫学会年次学術大会(オンライン), 2021年10月30-31日. 口頭発表.

- 竹内正人, 新川神奈, 川上浩司. 2021. 「目標収縮期血圧 120mmHg 未満とする指針が慢性腎臓病患者の腎機能に及ぼす効果の定量的評価」, 第 4 回日本臨床疫学会年次学術大会 (オンライン), 2021 年 10 月 30 日-31 日. 口頭発表.
- 土田哲也, 尾板靖子, 川上浩司. 2021. 「学校健康診断情報の PHR への利活用～児童生徒の健康増進に関する調査研究事業～」, 第 67 回日本学校保健学会学術集会 (愛知), 2021 年 11 月 5 日-7 日. 口頭発表.
- 李開理, 深澤俊貴, 吉田都美, 竹内正人, 川上浩司. 2021. 「ガバペンチノイドおよびトラマドールによる錐体外路症状のリスク: ケース・クロスオーバー研究」, 第 26 回日本薬剤疫学会学術総会 (東京), 2021 年 11 月 26 日-28 日. 口頭発表.
- 深澤俊貴, 漆原尚巳, 高橋勇人, 川上浩司. 2021. 「抗菌薬・抗真菌薬の使用とスティーヴンス・ジョンソン症候群及び中毒性表皮壊死症のリスク」, 第 26 回日本薬剤疫学会学術総会 (東京), 2021 年 11 月 26 日-28 日. 口頭発表.
- 竹内正人, 川上浩司. 2021. 「SGLT2 阻害薬の開始タイミングがその後の腎機能に及ぼす影響の評価: 電子カルテ情報を用いた解析」, 第 26 回日本薬剤疫学会学術総会 (東京), 2021 年 11 月 26 日-28 日. 口頭発表.
- Reiko Masubuchi, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2021. Longitudinal study of body mass index and maturity in Japanese children. 第 80 回日本公衆衛生学会総会 (東京), 2021 年 12 月 21 日-23 日. 口頭発表.
- Becker, CB. 2021. Meaning Gives Resilience to Jobs in Eldercare and Nursing. MEĐUNARODNI LOGOTERAPIJSKI KONGRES [International Logotherapy Congress], (Zagreb, Croatia, Online). 2021 年 5 月 16 日. 口頭発表.
- Becker, CB. 2021. Spirituality in Funeral Research, Practice, and Education. International Society for the Study of Spirituality, York, UK (and online). 2021 年 7 月 7 日. 口頭発表.
- Becker, CB. 2021. End of life decision-making and advanced care planning in Japan. 14th Asia Pacific Hospice Palliative Care Conference (Kobe, Japan). 2021 年 11 月 13 日. 口頭発表.
- カール・ベッカー. 2021. 「日本人の死生観とよみがえり」, 第 36 回日本催眠学会学術大会 (東大寺総合文化センター 金鐘ホール, 奈良市), 2021 年 11 月 28 日. 口頭発表.
- カール・ベッカー. 2021. 「死別悲嘆の社会的打撃」, いのち教育研究会・公開オンラインセミナー, 2021 年 12 月 11 日. 口頭発表.
- Ito, Junichi. 2022. Emerging Asian Economies and Global Trends of Agricultural Policy. Agricultural Economics Society of Japan. 2022 年 3 月 26 日. 口頭発表.
- Li, Xinyi and Ito, Junichi. 2022. An empirical study on technical efficiency and allocative efficiency of agricultural production in rural China: A stochastic frontier output distance function approach. Agricultural Economics Society of Japan. 2022 年 3 月 27 日. 口頭発表.
- 中山健夫. 2021. 「大規模データの収集から評価において注意すべきポイント」, 第 23 回日本医薬品情報学会総会・学術大会. 2021 年 6 月 26 日 (オンライン). 教育講演.
- 中山健夫. 2021. がんサポーターシップケアの新たな展望「共に探す: EBM から SDM (Shared Decision Making) へ」. 第 29 回日本乳癌学会シンポジウム 10. 2021 年 7 月 3 日. 講演.

- 中山健夫. 2021. 「各診療ガイドラインにおけるオピオイド鎮痛薬の位置付け「エビデンスに基づく診療ガイドライン：適正な作成から利用・普及に向けて」, 第40回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウムシンポジウム3. 2021年9月5日(オンライン). 講演.
- 中山健夫. 2021. 「研究公正を考える」, 第1回日本メディカルコミュニケーション学会. 2021年10月3日(オンライン). 講演.
- 中山健夫. 2021. 「禁煙マラソン・情報の見せ方伝え方」, 第16回日本禁煙科学会学術総会. 2021年10月12日(オンライン). 講演.
- 中山健夫. 2021. Shared Decision Making (SDM): Genesis and Future of EBM DIA. 日本年会 2021. 2021年10月24日(オンライン). 講演.
- 中山健夫. 2021. パネリスト. 「研究公正〈リサーチ・インテグリティ〉: もう一つの研究倫理」, 第64回医学系大学倫理委員会連絡会議(LAMSEC)シンポジウム2 テーマ「医療情報の利活用に関する課題」. 2021年12月25日(オンライン).
- 広井良典. 2021. 「生と死のグラデーションー死生観の再構築」, 東京大学臨床死生学・倫理学研究会, 2021年6月23日(オンライン). 口頭発表.
- 広井良典. 2021. 「21世紀の新たな社会像と統合医療」, 第25回日本統合医療学会(京都大会), 2021年12月18日(オンライン). 口頭発表.
- 要藤正任, 打田篤彦. 2022. 「Life Satisfaction Approach を用いたソーシャル・サポートの価値評価の試み」, 日本社会関係学会(オンライン開催), 2022年3月20日. 口頭発表.
- 祐野恵. 2021. 「日本の市レベルの議員による政策知識の取得に関する分析」, 日本公共政策学会 2021年度研究大会(オンライン), 2021年6月5日. 口頭発表.
- 祐野恵. 2021. 「政務活動費による政策知識の取得に関する考察」, 第35回自治体学会大会(オンライン), 2021年8月22日. 口頭発表.

講演会、展示会などのアウトリーチ活動

- 川上浩司. 2021. 招請講演, 「母子保健や学童の健診情報由来のデータベースを用いた疫学研究の基盤と未来」, 第7回母子栄養懇話会学術集会(オンライン), 2021年6月5日.
- 川上浩司. 2021. 特別講演, 「臨床疫学研究推進にむけたリアルワールドデータの活用」, 第57回日本循環器病予防学会(オンライン), 2021年6月6日.
- 川上浩司. 2021. 講演, 「リアルワールドデータの将来に向けた課題と利活用」, 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団(オンライン), 2021年7月14日.
- 川上浩司. 2021. 講演, 座長. 「幼少期からはじまる健診情報由来のデジタルコホート基盤の構築と予防医学研究に向けて」, シンポジウム「地域医療：データを活用した地域住民の健康、医療の向上に向けて」, 第4回日本臨床疫学会年次学術大会(オンライン), 2021年10月30日-31日.
- 川上浩司. 2021. 講演. 「ライフコースデータにおける母子保健や学童の健康診断情報由来のデータベースの構築と活用」, シンポジウム「健康危機で明らかになった地域保健上の課題：一人一人の健康を守り高める公衆衛生を目指して」, 第80回日本公衆衛生学会総会(東京), 2021年12月21日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「All-Japan Survey of Funeral Satisfaction and Medical Dependence」, FIAT-IFTA50周年記念シンポジウム(横浜 Pacifico & オンライン), 2021年6月23日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「全日本遺族調査でわかる葬儀の役割と影響力」, 全日本葬祭業協同組合連合会「フュネラルフェア」(横浜 Pacifico & オンライン), 2021年6月24日.

- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「日本の死生観の経験知に学ぶ」, 日立製作所オンラインシンポ, 2021年8月25日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「日本の死生観を医療に活かす」, 京都大学医学部概論依頼講義, 2021年10月18日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「日本人の死生観と宗教の役割」, 金光教研修会 (金光教会館, 大阪), 2021年10月26日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演. 「日本人の死生観の行方～生老病死を積極的に見詰める」, ELP 京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム (橘会館), 2021年11月6日.
- Ito, Junichi. 2021. 講演. Direct payment scheme for farmers' income compensation, Zhejiang University (浙江大学), 2021年9月1日.
- Ito, Junichi. 2021. 講演. Direct payment scheme for collective stewardship of farmland in Japan, Zhejiang University (浙江大学), 2021年9月1日.
- 広井良典. 2021. 講演. 「人口減少・ポストコロナ社会のデザイン」, 市町村議会議員特別セミナー, 全国市町村国際文化研修所 (国際文化アカデミー), 2021年4月15日.
- 広井良典. 2021. 講演. 「Policy Proposal using AI and the Concept of a Decentralized Society」, 韓国政策企画大統領委員会 (The Presidential Commission on Policy Planning of the Republic of Korea) 等主催「ポスト・パンデミック時代の東アジアにおけるニューノーマル (The New Normal in Post Pandemic East Asia)」 (オンライン), 2021年6月25日.
- 広井良典. 2021. 講演. 「新たな福祉の哲学とは何か: 人口減少社会での「越境する福祉」について考える」, 全国社会福祉法人経営青年会・制度・政策マネジメント委員会セミナー (オンライン), 2021年9月17日.
- 広井良典. 2021. 講演. 「政策提言 AI をめぐる展開と今後の展望」, 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「データ分析セミナー」 (オンライン), 2021年9月21日.
- 広井良典. 2021. 講演. 「高齢化をめぐる日本の経験と示唆——社会保障分野を中心に」, ベトナム・ホーチミン政治国家学院 (HCMA), 2021年10月15日 (オンライン).
- 広井良典. 2021. 講演. 「持続可能な福祉社会のビジョン——after コロナを見据えて」, 国際社会福祉協議会・北東アジア地域会議, 2021年11月9日 (オンライン).
- 広井良典. 2021. 講演. 「人口減少・成熟社会のデザイン——拡大・成長から持続可能性とウェルビーイングへ」, 幸せリーグ実務者会議, 2021年11月12日 (オンライン).
- 広井良典. 2021. 講演. 「創造的サステナブル社会——人類史とポスト・デジタルのビジョン」, COCN (産業競争力懇談会) フォーラム 2021 地球のサステナビリティへの産業界の貢献, 2021年12月16日 (オンライン).
- 宮野公樹. 2021. 企画・出演. 「問いを問う」, SHIBUYA QWS Innovation 協議会 (SHIBUYA QWS & オンライン配信), 2021年4月23日.
- 宮野公樹. 2021. 企画・講義. 「学びを学ぶ」, 東京理科大学社会人向け講座 (オンライン), 2021年5月13日.
- 宮野公樹. 2021. 基調講演. 「The 2nd Science XR Innovation Hub Virtual Forum ～越境し共創する研究シーズの発掘と事業開発～「問いを問う」」, 一般社団法人慶應反分野的サイエンス会, 2021年5月15日.

- 宮野公樹. 2021. 講義. 「良き問いを立てるには. 東京工業大学”立志プロジェクト」, 2021年5月20日.
- 宮野公樹. 2021. 出演. 一般社団法人 STEAM Association 設立ローンチイベント (Venture CAFE TOKYO) , 2021年6月3日 .
- 宮野公樹. 2021. 招待講演. 「問いの立て方」, 企業人事担当メンタルコンシェルジュセミナー, 2021年6月16日.
- 宮野公樹. 2021. 基調講演. 「よい問いの立て方」, 南山大学 FD 講演会・ワークショップ, 2021年6月21日.
- 宮野公樹. 2021. 登壇. 「学ぶを学ぶ」, QWS de RINRI シリーズ第7回「教育とは?」, SHIBUYA QWS Innovation 協議会, 2021年6月23日.
- 宮野公樹. 2021. 講演. 横浜市立大学大学院博士後期課程「多分野交流演習」, 2021年7月3日.
- 宮野公樹. 2021. 講演. 第2期 京都大学 SDGs リーダー育成プログラム (中高生対象) (オンライン) , 2021年7月10日.
- 宮野公樹. 2021. 招待講演. 「研究室運営を考える」, 山口大学研究者育成プログラムセミナー, 2021年7月14日.
- 宮野公樹. 2021. 登壇. 「これで伝わる! 学生・若手技術者のためのプレゼン術」, 日本材料学会北陸信越支部オンライン実技講習会, 2021年7月16日.
- 宮野公樹. 2021. 出演. 対話型学術誌「といたうとい」ローンチイベント (京都大学学際融合教育研究推進センター) , 2021年7月27日.
- 宮野公樹. 2021. 招待講演. 「学術界と学際研究」, 科学技術振興機構 CRDS 研究会, 2021年7月28日.
- 宮野公樹. 2021. 登壇. 日本版 AAAS 設立準備委員会 第3回意見交換会, 2021年8月28日.
- 宮野公樹. 2021. 登壇. 「集合知ネットワーク構築に向けて」, 科学技術振興機構 (JST) サイエンスアゴラ 2021, 2021年11月6日.
- 宮野公樹. 2021. 講演. 「What is Interdisciplinary Fusion? (学際、異分野融合とは何か?)」, 京都大学大学院総合生存学館思修館 10th International Symposium on Human Survivability Transdisciplinary Perspectives : "Well-being & Innovation", 2021年11月22日.
- 宮野公樹. 2022. 講演. 「研究者の関心事を引き出す研究環境・学際研究の在り方」, 科学技術振興機構 研究開発戦略センター ワークショップ報告書「科学技術イノベーションによる社会的・経済的価値創造のエコシステム形成へ向けて」, 2022年1月25日.
- 宮野公樹. 2022. 特別講演. こころの科学ユニット ユニット総会・研究交流会, 2022年2月12日.
- 宮野公樹. 2022. 登壇. 「データ駆動型学際イノベーション」, 学際融合教育研究推進センター葛ユニット 第7回京都大学研究データマネジメントワークショップ, 2022年3月4日.
- 宮野公樹. 2022. 基調講演. 「なぜ問いを問うのか」, 一般社団法人 STEAM Association の期末報告会, 2022年3月12日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2021

2022年7月31日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]